

# 五臓六腑色懺悔

校倉 元

## 【登場する役柄】

- 蛤……………捨吉の母
- トロロロ／おまん／お伝……………三途の川の渡し守／腰元頭／茶屋の女房
- 天狗／頓兵衛……………捨吉の魂主／蛤の元旦那
- 甚兵衛／その他……………捨吉の腎臓「天狗の仲間」／筵など
- 新之助／その他……………捨吉の心臓「天狗の仲間」／筵など
- 胡弓／その他……………捨吉の肺臓「天狗の仲間」／筵など
- 緋牡丹／その他……………捨吉の脾臓「天狗の仲間」／筵など
- 勘太／その他……………捨吉の肝臓「天狗の仲間」／筵など
- 河童／呑兵衛……………捨吉の魂主／茶屋の亭主
- 亥之助／その他……………捨吉の胃袋「河童の仲間」／筵など
- 長十郎／その他……………捨吉の大腸「河童の仲間」／筵など
- 長五郎／その他……………捨吉の小腸「河童の仲間」／筵など
- 坊主尼／その他……………捨吉の膀胱「河童の仲間」／筵など
- 睡蓮／その他……………捨吉の膀胱「河童の仲間」／筵など
- 三笑／その他……………捨吉の三焦／筵など

## 上の巻

### 一、三途の川 六道堤

ぬめりとした血が匂う夜――。

よく耳を澄ますと、川のせせらぎが聞こえる。それに混じって、筵の擦れる音が聞こえるかもしれない。草木の音が聞こえるかもしれない。ただ、まだほとんどが混沌の中に眠っている。

やがて、闇のどこかから一筋の灯りが見えてくる。

竹竿を持った女が、それを杖にして土手を登ってくるようだ。

その女は、竿で闇のあちこちを探っている。

そのうち、なにかに当たったのか竿を掻き回し、土砂を撒き散らすように竿を振り上げる。それに合わせて、闇の中からいくつもの筵が蠢きだす。

やがて、筵たちは薄闇の中を舞い踊り始める。——それはまるで蝙蝠のダンスだ。

砂嵐のような乱舞がおさまると、別の女がぼんやりと立っていた。

竹竿女　いま、梅干し婆アって呼んだかい？

女　いいえ。

竹竿女　じゃあ、そう呼んでごらん。

女　梅干し婆ア。

竹竿女　(女を引っ叩き)なんてひどい呼び方するんだっ！

女　だってそう呼べと。

竹竿女　あたしが？

女　ええ。

竹竿女　もしそうだとしたら、とんだ付和雷同だね。

女　……………。

竹竿女　流されずにあなたの好きなように呼ぶんだよ。イチジクは、イチジクと呼ば

れるずっと前からあったけど、イチジクと呼ばれて初めてイチジクになった

んだ。でも、あなたがそれをチリメンって呼びたいなら、それはあなたにと

ってチリメンだ。名前っていうのはそういうものさ。

はあ…。

竹竿女　さあ、呼んでみな。

女　いきなり言われても困ります。

竹竿女　そんなこったから自分を見失うんだ。仕方ないから、トコヨミと呼んでみな。

女　トコヨミ…。

竹竿女　もつと大きく！木霊が返らないじゃないか。

女　トコヨミ…！

筵たち　ハマグリ…！

トコヨミ…？

女　あたしが呼ばれました。

トコヨミ…　あんた蛤っていうのかい？

蛤　はい。でも、なんであたしが呼ばれたのやら。

トコヨミ…　自分を見失ったあんたが水先案内を求めているのが、亡者たちにはわかるんだ

ろうね。

蛤　亡者？ここはいったいどこなんです。

トコヨミ…　(にやりとして)黄泉と常世の境目さ。死に損なってふらふらと彷徨い込んだ

あんたにゃあ、お誂え向きのねぐらじゃないか。寝床が欲しけりや貸してや

るよ。

蛤　こんな処で寝たかありません！

ト  
自分で迷い込んだくせに、こんな処たあご挨拶だね。そんならまだふらつき廻る気なのかい。

蛤 (うなずき) 探し物が見付かるまでは。

ト  
いったい何を探してるんだい。

蛤 マツケ。

ト  
なんだいそりゃ？

蛤 邪魔っケのマツケ。倅の捨吉は、そう呼ばれていたんです。

ト  
もうちよつと教えて。

蛤 あたし、こんなポンポッピーですが、なぜか男に口説かれて、口説かれちゃつたら悪い気せんから、靡いて靡いて流されて、あっちへふらふら、こっちへふらふら、あっちでこちよこちよ、こっちでこちよこちよするうちに、ぼっこりこの辺膨らんで…、  
産まれちゃった。

ト

蛤 (うなずき) 産まれちゃつたはいいけれど、誰の種かも知れぬまま、なおもふらふらするうちに、いつしか男に疎まれて、気付けばとんだ村八分。

ト  
手のひら返しに遭つたんだ。

蛤 はい、ふらふらのその果てに。

ト  
それで？

蛤 それから倅と村を出て、ねぐら求める渡り鳥、どん底暮らしのその中で、ついつい叱り時には手も出、だんだん減つてくマツケの口数、どんどん膨らむ借金の高、喰うに喰われず始めた夜鷹。  
とうとうその身を売ったのかい。

ト

蛤 (うなずき) もともと好きな色の道、好きこそ物のなんとやら、口数少ない蛤も、紅塗たくつて形(なり)も変え、寄つてらっしゃい寝てらっしゃい、自ら売り込む舌先三寸、その源氏名もサエズリと、変えれば変わる暮らし向き、流せば客の引く手あまた、連れ込むボロ屋はたった一間、狭くて暗いその中に、輪を掛け暗いマツケの姿、ついつい邪魔に押し入れへ、事の済むまで塵紙で、ぬぐつて客の帰るまでと、閉じ込め日銭を稼ぐうち、在郷一の分限者で、飛ぶ鳥落とす頓兵衛どんに、またもうかうか誘われて、懲りずに乗った口車、とうとう倅を捨てました。

ト  
捨てた？

蛤 はい…。親はなくとも子は育つと、寝物語に乗せられて、マツケを遠くの寺に捨て、男と暮らし始めたものの、すぐに飽きられ捨てられて、こつこつためた虎の子も、奪われすっかり無一文。  
身から出た錆だよ。

ト

蛤 (悲しくうなずき) それから男を何度替えても、おんなじことの繰り返して、この身も心も擦り切れて、増えるは歳の数ばかり。それでようやく眼が覚めて、倅を探して親子二人でやり直そうと、あちこち尋ね歩きましたが、どうにも行方が知れぬゆえ、途方に暮れて疲れ果て、いつそ死のうと身を投げましたが、恥ずかしながら死に切れず、ここへ迷い込みました。

トヨヨヨヨ  
欲に走って捨てた子を、今さら頼って探すとは、ずいぶん身勝手な話だねえ。それはわかっておりますが、死に損なった上からは、なんとか倅に巡り合い、邪険な仕打ちを謝って、あの子と二人でもう一度、生き直してみたいんです。欲にまみれたおまえさんに、それが出来るか怪しいもんだが、そこまで言うなら手を貸してやらんでもないわな。

トヨヨヨヨ  
どうかお願い致します。

トヨヨヨヨ  
そんなら聞くが、なにか手掛かりはあるのかい？

トヨヨヨヨ  
無残に捨てたあの頃からは、月日も流れ、顔も容も変わっておりますが、たった一つの手掛かりは、掛けて渡したお守り袋。

トヨヨヨヨ  
お守り袋？

トヨヨヨヨ  
はい。欲得づくで寺まで連れて参りましたが、さすがに捨てて帰ると言えず、その場しのぎでお守りを頂き、せめてもの罪滅ぼしにと、首から掛けてやりました。

トヨヨヨヨ  
(鼻で笑い)それであなたの気は晴れようが、酷い仕打ちに変わりなし、罪滅ぼしが聞いてあきれれる。

トヨヨヨヨ  
返す言葉もございませんが、どうかお手を貸してくださいませ。

トヨヨヨヨ  
それで、どんな袋なんだい？

トヨヨヨヨ  
はい。ついでに我が身も守ろうと、その時もらったお守り袋、(懐から袋を出して)…これと同じでございます。

トヨヨヨヨ  
つくづく身勝手な女だねえ。どれ、ちょっと貸してみな。(手を出し受け取り、匂いを嗅いでしげしげ眺めて)なるほど、なるほど…。うん、見えた！どこにどうして？

トヨヨヨヨ  
(にんまりして)知りたいかい？

トヨヨヨヨ  
はい。どうぞ教えて下さいませ。

トヨヨヨヨ  
(袋を蛤に返して)…眠ったままさ。え？

トヨヨヨヨ  
あなたの倅は、寝たきり起きない生き止まりさ。

トヨヨヨヨ  
どういふことですか？

トヨヨヨヨ  
魂ふらふらフラついて、生きてはいるが眠っているのさ。

トヨヨヨヨ  
それはいったい…。

トヨヨヨヨ  
まあ、自分で自分がわからんようになっちまったんだね。身体は死んじやいないけれど、魂が居場所を失って、死んだように眠ってるんだ。どういふことですか？

トヨヨヨヨ  
人の魂っていうやつは、一つだけじゃないんだよ。中でも大きな魂で、身体の方にも顔が効くのを、魂主(たまぬし)って言うんだが、それも大抵いくつかあって、普段は互いに折り合い付けて、うまく収まるものなのさ。ところが、たまくに二つ三つの魂主が競り合いになることがある。すると居場所を取り合って、収まり付かなくなっちまうんだ。そうなるらと身体は生きたままなのに、眠ったままになっちまう。あなたの倅はそうだったのさ。

トヨヨヨヨ  
そんなら巡り合ったとしても、話すことさえままならないと？

トコヨミ  
まあ、あんたにその気があるのなら、元に戻らんもんでもないわさ。  
どうしたらいいんでしようか？

トコヨミ  
(川の方を指し)その川を下つていくと、死に損ないの引つ掛かる淵がある。  
そこに倅を流してやるから、舟に乗って胎内にお入り。

蛤  
タイナイ？

トコヨミ  
ああ。今の倅の身体の中さ。はたして競り合いが収まるか、切った張つたで  
共倒れか、ここから先は、あんた次第だ。どっちに転ぶか知れぬ道だが、中  
に入ってみる気はあるかい？

蛤  
はい。

トコヨミ  
そんなら船頭に伝えておくよ。その先の舟着場で待っていないな。

蛤  
よろしくお頼み申します。

トコヨミ  
(うなずき)まあ、気を付けて行くがいいや。

蛤  
はい、ありがとうございます。(去る)

どこかから生ぬるい風が吹いてきて、あちこちから筵たちの声が聞こえ  
始める。

筵たち

おんばらばら うんばらばら  
おんばらばら うんばらばら  
おんばらばら うんばらばら  
おんばらばら うんばらばら

筵たちの声が次第に大きくなって、呪文のように響き渡る。

それに合わせて風が舞い、トコヨミは土手の上に立つ。

トコヨミ

箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川。水が引いたら舟漕ぎ出す  
が、それでも越せぬは三途の川よ。三途の川にや魚も住まぬ、せめて掛かれ  
や泥鯱。どれ、この返を探ってみようか。

竿にて川を探る。筵たちの声が戻ってくる。

筵たち

おんばらばら うんばらばら  
おんばらばら うんばらばら  
おんばらばら うんばらばら  
おんばらばら うんばらばら

筵たちの声、次第に大きくなって、再び呪文のように響き渡る。

菰を掛けた戸板が流れてくる。

トコヨミ

それ、掛かったか。

トコヨミ、竿にて戸板を引き上げる。  
よきところで戸板の菰が落ちると、顔に白い布を掛けられて死装束を  
着せられた男が張り付いている。

トコヨミ  
これ、それを着るには早過ぎる。(ふつと笑つて竿で戸板を押し流そうとするが、すぐ思い留まり、にんまり笑つて) : : どれ、その前に中の様子を見てやろう。

トコヨミ、竿を傍に置き、両手を丸めて筒のように重ね、男の身体に  
向けて覗き始める。——その中で、ゆっくりと暗くなっていく。

## 二、鳩尾平 天狗陣屋

光が戻ってくると、そこは天狗の陣屋である。

新之助が横になつて緋牡丹に腰を擦らせている。

胡弓は座つてなにか読んでいる。

相変わらずひどい懲りようだね。

最近出入り続きで寝る間がないのさ。

心臓に寝られちゃお陀仏じゃないか。

馬鹿言っちゃいけねえよ。心臓だつて時には休むよ。

知つてるけどさ、死なない程度に頼みますよ。

こう朝から晩まで使われちゃ、腰も立たなくなっちゃう。

(股間を軽く叩き)それでもここは立つんだろう。

違えねえ。

その元気があれば大丈夫さ。

まあとにかく揉んでくれ。さっぱりしこりが取れやしない。

はいはい。

新之助、あれこれ指図して緋牡丹に揉ませている。

(入つて)新之助、また揉ませてるのか。

股じゃねえ、腰だ。

どっちでもいいが、あんまり緋牡丹ばかりに揉ませたら可愛そうだ。

こいつは脾臓だからいいのさ。飯時以外は暇なんだから。

何言つてやがる。それは腓臓じゃねえか。いい加減憶えたらよさそうなものだ。なあ。

緋牡丹  
新之助  
緋牡丹  
新之助  
緋牡丹  
新之助  
緋牡丹  
新之助  
緋牡丹  
新之助  
緋牡丹  
新之助

甚兵衛  
新之助  
甚兵衛  
新之助  
甚兵衛

緋牡丹　まあいいよ。今はあたしも暇だからさ。あんたも次に揉んでやろうか？  
甚兵衛　そうしてもらいたいのは山々だが、そうもしちやいられねえのさ。天狗の旦那がまた新しい作戦を言い渡すから揃って待てとのお達しなんだ。

新之助　こないだ変えたばかりじゃねえか。  
甚兵衛　俺もそうは思うんだが、大将が言うんじや仕方ない。そう言えば勘太がいないが、どこ行ったんだ？

緋牡丹　おそらく湯にでも漬かつてるんじゃないかねえ。  
甚兵衛　またかよ。

緋牡丹　まあ疲れてるんだ、乱取のない時ぐらい大目に見ておやり。休肝日は大事だつて言うじゃないか。

甚兵衛　緋牡丹は勘太に甘すぎる。いくらなんでも休み過ぎだ。いっつも肝心な時にいねえじゃないか。

新之助　まあ平日に新聞の出ねえ日もあるさ。  
胡弓　うまいこと言うなあ。

甚兵衛　なにがうめえんだ？  
勘太さんの休肝日はキモのカン、新聞の休刊日は刊行のカンでしょう。

胡弓　さつぱりわかんねえ。おめえ、わかるか？  
甚兵衛　もちろんさ。

甚兵衛　くそ面白くもねえ。おい胡弓、読み書きが出来るからって威張るんじゃないぞ。いくさになりやあ、そんなもんなんの役にも立たねえんだ。

緋牡丹　なにも胡弓に当たるこたないじゃないか。  
甚兵衛　当たってなんかいねえよ、べらぼうめ。とにかく風呂ならすぐ呼んで来い。

大將が来た時いとまずい。  
緋牡丹　そんならちよつと…。(行きかける)

甚兵衛　なにも緋牡丹が行くこたあねえ。(新之助に)　おい、おまえ呼んで来い。  
新之助　呼びに行きたきや、おめえが行け。

甚兵衛　そりやあ行かねえもんでもないが、おまえに命令されたかねえや。  
新之助　なに偉そうな口叩いてやがる。腎臓は黙ってシモの処理でもしてやがれ。

甚兵衛　なんだと。もう一度言ってみろ。  
新之助　おう、何度でも言ってやらあ。このソラマメ野郎！

甚兵衛　なに言いやがる、ハツの塩焼き！  
緋牡丹　もう喧嘩はよしなつてば。いいよ、あたしが呼んでくるから。

胡弓　その必要はないと思うよ。  
緋牡丹　え…。

胡弓　ほら、いつもの歌が向こうから…。  
緋牡丹　ほんとだ。

勘太　(替え歌で『梅は咲いたか』を歌いつつ)お湯くは、なみくなくみ、お風呂くは、はよいわいな、アチヨイナ、着替くえ忘れたら、はだくかくでいやしやんせ…。(入つて)　あ、どうも皆さんお揃いで。

甚兵衛　お揃いじゃねえっ！　いったい何度入ったら気が済むんだっ！

勘太 今日はまだ三度目でござるよ。

甚兵衛 三度も入ってんじゃねえ！

勘太 一度や二度じゃ疲れも汚れも取れんのでござる。

甚兵衛 ったく、どこ擦ってんだか知れたもんじゃねえや。たまには肝臓らしく肝を据えてじっとしてたらどうなんだっ！

勘太 そんなに怒鳴らんでもよござんしよう。

緋牡丹 まあ、とにかくお成りに間に合ったんだ。一安心さ。

勘太 お成り？

緋牡丹 天狗の大将様が、また作戦を変えるんだとさ。

勘太 またでござるか？

緋牡丹 ああ、まったく天狗心と秋の空さ。

おまん (奥の方から声のみ)天狗様のお成り。

甚兵衛 おいつ、お成りだぞ！身支度して並べ並べ。

緋牡丹、勘太の身形を整えてやる。

甚兵衛、その様子を悔しそうに見ながら居住いを正す。

おまん (声のみ)お成り。

天狗、おまんを従えて入ってくる。

天狗 揃ったか？

甚兵衛 はいっ！

天狗 うむ。おまん。

おまん はい。

天狗 人払いして、手を鳴らすまで控えている。

おまん かしこまりました。(二礼して去る)

さて五人衆が集まってもらったのは他でもない。我が天狗一族は、これまで様々な改革を重ねてきた。そのおかげで、昔は大き過ぎて運べなかつた食糧も、分解して運搬できるようになった。しかし、これからはさらに利便性を高めて進化せねばならん。すなわち、我々自身の手で食糧や熱源を作って備蓄するのだ。そのためにも、工場の建設を含む再開発計画は、ぜひとも成し遂げねばならんのである！

(拍手してから手を上げ)恐れながら申し上げます。

新之助 なんだ新之助。

天狗 誠に仰せごもつともで、有り難く聞かせて頂きましたが、ちよいと気掛かり

なことを申し上げます。あつしには、なんだか天狗様が違うお人になつたような気が致しましたんで。

天狗 どういうことだ。

新之助 へい。なんと申しますか、喋り方とでも言うんですかい、なんだか違う国の



言葉を聞いているような…。なあ、そうは思わねえか。

緋牡丹

甚兵衛

そうだねえ、なんだか立て板に水で響きがいいが、別のお方のようだねえ。おい、失礼じゃねえか！すんません、ガサツな野郎どもで。

天狗

(笑って)いや、そう思うのも無理はない。これこそ今回申し渡す新しい作戦のひとつなのだ。

新之助

さっぱりわけがわからねえ。

天狗

いいか。新しい時代を築くには、工場の建設は言うまでもないが、我々の精神も新しくすることが肝要である。そして、新しい時代にふさわしい精神を育てるには、今までのような時代錯誤の喋り方では駄目なのだ、遅いのだ、まどろっこしいのだ！そういうわけで、今後は…(懐から書物を出し)これを手本に上等語を話してもらおう。胡弓！(胡弓を手招き、書物を渡す)

胡弓

(受け取り)え〜『新しい国語』…(開いて)「ススメ、ススメ、ヘイタイススメ。 スズメ、スズメ、キタキリスズメ」

天狗

うむ。後でやつらに教えてやれ。さて、もう一つ伝えておくべき重大な作戦がある。名付けて、カッパライ作戦。

新之助

かっぱらい？こそ泥ですかい？

天狗

いや、河童を払う。

甚兵衛

河童を、払うか…。

天狗

うむ。いまさら語るまでもないが、我々が再開発を計画している地域には、俺の支配に入ろうとせん河童どもが棲息している。奴等のように自然の恵みだけで暮らそうなどという下等な考えは、我々先進的な一族を脅かす危険思想である。自然との共生といえば聞こえはいいが、そのせいで釣鐘池の周辺には、いまだに小さな工場すら立てられずにいる。このような状況は、もはや看過することは出来ないのである！

新之助

するつてえと、なんですか。早え話、河童どもを追っ払うと。

天狗

まあそんなところだ。

勘太

ちよつと待って下さいやし。

天狗

なんだ。

勘太

恐れながら申し上げます。かの河童ども、今でこそ数は少のうござりますが、もともとあの辺りは古くから奴らが住んでいた土地でござります。それを力づくで追い払うとなりますと、おいそれと黙って従うはずもなし、かえって事をこじらせ、ご計画が進まなくなる恐れもあろうかと。

天狗

さすが肝臓。なかなか鋭い指摘ではある。しかし、なにも武力で追い払うと言っているわけではない。

甚兵衛

いくさを仕掛けないとすりゃ、いったいどうして。

天狗

河童とは水がなければ生きられぬもの。あの池を埋め立ててしまえば、水を求めて立ち退くだろう。河童は去って、工場が立つ。一石二鳥の作戦だ。

新之助

なるほど、その手があったのか…。

甚兵衛

さすが天狗さん、頭の出来が違う。

天狗

もつと言つて！

甚兵衛

天狗さんは天狗の中の天狗、大天狗だ！

天狗

いいねえ、その響き。グッと来ちゃうね。

勘太

恐れながら天狗様。池を埋め立てるとはいっても一仕事、手間も人手も掛かりましょう。わが方の穩健派たちも説得せねばなりません。ここはじっくり策を練るのが肝要かと。

天狗

言うにや及ぶ。

胡弓

あれ天狗さん。口調が時代に戻ってますよ。

天狗

こりゃあ、一本取られたわ（笑う）。そうだ胡弓、作戦成功の前祝いに、ひとさし舞って見せろ。

甚兵衛

そりゃあ、いいや。

天狗

ひとつ景気のいいのをやってくれ。（手を鳴らして、おまんに合図）

胡弓

それなら、新しい踊りをご披露しましょう。

緋牡丹

いいねえ、見せとくれ。

天狗

お題はなんだ。

胡弓

うかれ天狗でございます。

新之助

やんや、やんや。

おまんが天狗に酒など載った膳を出す中、胡弓の踊りが始まる。

緋牡丹は、勘太に寄り添って嬉しそうに見ている。

甚兵衛は、何度か緋牡丹を引き寄せようと試みるが、袖にされる。

そんな中、筵の幕が場面を隠していく。

### 三、水月堂 神楽殿前

筵の幕が開くと、そこは釣鐘池の近くにある水月堂と呼ばれる場所だ。

神楽殿の前では、芝居の稽古をしているようだ。

大鎌を振りかざして暴れる長五郎を、長十郎が後ろから抱きとめている。

何をするのじゃ、離しやがれ。

いいえ、離しはせぬぞや。鎌など持つてどこへ行く気じゃ。

知れたことよ。稲喰い荒らすクチナイナゴ、この大鎌で退治するのだ。

短気は損気の次郎丸。あの化け物に刃物は敵わぬ。この蛸八がかねて教えし腹踊りにて、笑い死にをさせるが上策。

それじゃと言うて、今も稲穂が。

急がば回れの俚諺あり。さあ腹出して、目鼻描かせよ。

（手を叩いて）はい、はい。そこまで、そこまで。

なんだ、また止めるのか。今度はなんだい？

ああ、長五郎の次郎丸はだいぶ良くなったんだが、長十郎の蛸八が今ひとつ

なのさ。

長十郎 どこがいけないんだろう…。

坊主尼 いいかい、この場面の蛸人は本物じゃなくて、クチナワイナゴの恋女房が蛸八に化けて、夫を殺させまいとしてるわけだから、所々に女っぽい仕草を織り交ぜなきゃいけないんだよ。

長五郎 おい、そんな複雑な設定だったのか？

坊主尼 なに言ってるんだい。どうせ自分のセリフしか読んでないんだろ？

長五郎 当たり前だろ。ヒトのセリフまで読んでたら、こんがらがって憶えられないじゃないか。

坊主尼 とにかく、そういうこつたから、そこんとこ押さえてやっどくれ。あんまり時間がないんだからさ。

長十郎 それはわかってるけど、女っぽい仕草って言われてもなあ。

長五郎 なあに出来るさ。兄貴は、普段からゆっくり伸び縮みしてるじゃないか。

坊主尼 そうだよ。なんだかんだ言ってる吸収は早いんだからさ、すぐに出来るよ。

長十郎 そうかなあ。済まないが坊主尼、ちよいと見本を見せておくれよ。

坊主尼 ダメダメ。あたしがやったら、小便小僧になっちまうよ。

長五郎 違いねえや。(笑う)

坊主尼 (下品な仕草で)坊主と尼になり損なつた破戒僧の膀胱様じゃ。(笑う)

長十郎 弱つたなあ。誰か教えてくれないかしらん。

長五郎 ああ、そうだ。墓守の三笑に聞いてみたらどうだろう。

坊主尼 うん、そうだね。三笑なら芸事に詳しいから、きつと知恵を貸してくれるだろうよ。

長十郎 じゃあ、日が暮れたら行ってみようかな…。

坊主尼 ああ、そうするがいいさ。まあ、今はとにかくもう一度、同じところから返してみようか。

長五郎 わかった。じゃあ、兄貴、抱きとめてくだんせ。

長十郎 はいはい。

坊主尼、長十郎たちの立ち位置や形などを直したりしている。  
向こうから、河童と睡蓮が連れ立って出てくる。

睡蓮 さあ、河童さんの番よ。

河童 わかっていますよ。ええと…、もう一度言ってくださいな。

睡蓮 烏より 黒く焼けたる 案山子かな

河童 ああ、そうでした…。では、こう続けましょう。「ここは山田の 日照りなるべし」、どうです？

睡蓮 駄目だめ、それじゃあ謎掛けじゃない。転じてないわよ。

河童 そうですか…。どうもその転じるというのが難しい。

睡蓮 だからね、うまいこと風景が変わるように考えて…、例えば「野焼きの煙 裾にたなびく」

河童 はて、どういう心か…。

睡蓮 夏の田んぼから、春の山に転じてるのよ。まあ、すぐ付けたから下手くそ

河童 で、「焼く」って言葉がカブってるけど…。

河童 いやいや、どうして。あたしや考え付きもしませんでした。(本舞台に入り)

河童 おや、お揃いですね。

睡蓮 なにしてたの？

坊主尼 背骨祭に奉納する芝居の稽古だよ。新作を出そうと思ってるさ…。

河童 それはなによりですね。どんなお芝居なんです？

坊主尼 刈り入れ前の稲穂を荒らす化け物イナゴを退治する話なんですよ。

河童 そりゃあ、面白そうだ。

長十郎 でも、なかなか役作りが難しくくて。

長五郎 おいらは、お茶の子ですけどね。

坊主尼 河童さんたちの出し物は決まったんですか？

河童 今、睡蓮ちゃんが考えてくれてます。

坊主尼 今年もまた奇術かい？

睡蓮 奇術はもうやめにした。なんだかご先祖様を騙すみたいな気がするから…。

坊主尼 なんだ、楽しみにしてたのにさ。ねえ。

長五郎 ああ。去年のほら…、蛇から象が出てくるやつ、ぶったまげたよ。

睡蓮 今年は、もっと静かに祈りを捧げる感じで行こうと思ってるんだけど…。

坊主尼 まあ、それもいいかもしれないけど、やっぱりお祭りは賑やかな方がいいよ。

坊主尼 そう思いませんか？

河童 あたしは、ご先祖様が喜んでくださるならどちらでも結構ですよ。

長十郎 漫才でもやったらどうだい、亥之助と三人組で。

坊主尼 いいかも知れないね。ボケの河童さんを二人で突っ込む。

河童 あたしや、まだボケてなんかいませんよ。

坊主尼 (おどけた格好をして)こりやまた失敬。

その仕草に皆々笑っているところへ、亥之助が叫びながら走ってくる。

亥之助 大変だ、大変だ！(刷り物を握って出て)おい、大変なことになったぞ！

長五郎 どうした亥之助。

亥之助 さつき池の端に高札が出てやがった。

長五郎 高札？

亥之助 うん、天狗がお触れを出したんだ。

長十郎 お触れ？

亥之助 ああ。それがひでえお触れなんだ。もう読んだ瞬間、こころ胃酸が溢れてさ、潰瘍が出来そうになっちゃったぜ。

坊主尼 いったいどんなお触れなのさ。

亥之助 いいか、よく聞いてくれ。そこで撒いてた刷り物だ。ええ…、「釣鐘池は、

近いうち埋め立てることになりましたので、池周辺で寝泊りするなどして暮

長十郎 移住？

亥之助 うん。つまり引越せって言うわけよ。

長五郎 俺たちに出て行けってことか？

亥之助 ああ。その続きだ：「ひと月以内に移住を受け入れて申し出た方には、ぜん

まい仕掛けで動く特製天狗人形をもれなく差し上げた上、引越しに掛かる費用の半分をお支払いするかもしれない」だよ。

坊主尼 ばかばかしい。断つたらどうなるんだい？

亥之助 うん。「もし移住を拒み、再三の要請にも従わず居残った方に対しましては、

しかるべき処置を取りますので、覚悟しておくなまし。天狗」以上だ。

長五郎 しかるべきって何だ！

亥之助 そりゃあわかんねえが、おそらく力で潰しに掛かる気だ。つまり脅しよ。

長五郎 そんな脅しに誰が乗るもんか！

坊主尼 そうだよ、この辺りは大昔からあたしらが暮らしてきた場所じゃないか。天

狗の好きにはさせないよ！

亥之助 その気持ちは俺だつて同じだが、なにせ相手は天狗だ。一旦決めた計画をそうやすやす取り下げるとは思えねえ。ましてや高札まで出したんだ、今度は相当に本気だろうさ。

睡蓮 背骨祭はどうなるんだろう…。

亥之助 今それどころじゃねえだろうが！

長五郎 たしかに、そんな話を聞いてちや祭どころの騒ぎじゃねえな。

長十郎 うん、そうかもしれないね。

河童 いや、お祭りは大切ですよ。

亥之助 河童さん…。

河童 こうして私たちが元気に暮らしてられるのも、すべてご先祖様のおかげです。命をつなぐ水や食べ物を守ってくださいるご先祖様に祈りを捧げて、悪霊を鎮める背骨祭は、一年に一度の大切なお祭りですからね。それに、あたしは、お祭り自体も大好きなんです。

睡蓮 うん、あたしも大好き。

亥之助 や、そりゃ俺だつて祭は好きだが、ここ追い出されたら祭どころじゃなくなっちゃうじゃねえか。河童さん、そうじゃないですかい。

河童 そりゃあ違いますよ。

亥之助 違う？

河童 はい。今、あたしらが浮き足立って背骨祭をやめたりしたら、それこそ向こうの思う壺です。天狗は、あたしらがあたふたして、揉めて、散り散りになるのを待っているのです。そうなれば、あたしらの中にも、滅多にしない争いごとに手を出す者が出るだろう。彼らは、それを狙っているんですよ。

坊主尼 なるほど。こっちが先に手を出したら、あいつらは一気呵成に攻めてくる。

長五郎 そしたら天狗の思う壺だね。

長五郎 たしかにそうだな。力と力の戦になったら、とうてい俺たちに勝ち目はねえ

しな。それこそ一網打尽にされちまう。

河童 ええ。だからね、あたしらは今までどおり普通にしていればいいんです。お祭りをやめることはありません。

睡蓮 じゃあ、出し物考えていいの？

河童 ええ、お願いします。

亥之助 そうは言っても、気が気じゃねえしなあ。まあ、祭の準備は続けるとしても

だ、向こうが強引に出てきた時に備えて、こっちの守りも固めておこうや。

坊主尼 そうだね、備えあればなんとやらだ。

長十郎 なんとやらって？

坊主尼 (科を作って)なんとやらは、なんとやらじゃわいなあ。

その仕草に皆々吹き出すところへ、三笑が力なく歩いてくる。

長五郎 どうした三笑、まだ昼寝の時間だろ？珍しいな。

三笑 ああ…。

睡蓮 どうしたの？

三笑 うん…、なんかちよつと眠れなくて…。

睡蓮 なんかつた？

三笑 うん…、まあ…、ちよつとね…。

坊主尼 なんだい、気になるじゃないか。言っでごらんよ。

三笑 はい…。墓場の奥に、ご先祖様を祀ったご随石がありますよねえ。

亥之助 なんだい、改まって。

河童 まあまあ。それがどうしたんですか？

三笑 はい、ご随石の周りにはいろんな草花が生えています。中でも僕が大好き

なのが、ちょうど今頃に花が咲くショウバミっていう草なんです。

坊主尼 ああ、知ってる知ってる。たしか…、(手で示し)こんな丈の草だったね。

三笑 ええ。ショウバミの花は小さいけど、真っ白でとても綺麗なんです。でも、

今年の花は、なんだか少し赤み掛かって見えるんですよ。

睡蓮 そうなんだ…。

三笑 うん。皆さんが見たら気付かないかもしれないけど、僕は、毎日お墓にいる

からわかるんです。今年の花は、なんていうか…、薄紅色っていうのか…、

とにかく真っ白じゃないんです。

長十郎 よくわからないけど…、花だって生きてるんだから、そんな年もあるんじゃないのかしらん。

三笑 でも、一輪や二輪じゃないんです。しかも、目を追うごとに、その色が少し

ずつ濃くなっているような気がするんですよ。

長十郎 そう…。

三笑 それに、もう一つ気になるのがヤブコウモリの鳴き声…。ちよつとショウバ

ミの咲く頃に巢作りをするんで、昼間も飛び廻っていますけど、その声がい

つになくダミ声で、なんだか喘息にでも罹っているようなんです。

長十郎

三笑

三笑

三笑

三笑

三笑

三笑

長五郎

なるほど、そりや奇妙だな。

三笑

だから、僕の気のせいかもしれないし、思い過ごしかもしれませんが、なんだか気持ちが悪くて、ここんとこよく眠れないんです。

河童

そうだったんですか…。

亥之助

よくわかんねえけど、墓守の三笑が気になるんじや、なんかしら妙なことが起こってるのかもしれないし…、ほら、「百聞は一見に如かず」って言うからさ、どうだい、これからちよつくら見に行ってみようじやねえか。

河童

そうですね。行ってみましょう。

三笑

すみません、なんかお騒がせしちゃったみたいで…。

睡蓮

そんなことないよ。さあ、一緒に行こう。

三笑

うん。

バラバラと出て行く一同を、筵の幕が隠していく。

#### 四、道行旅路蛤

みちゆきたびじのはまぐり

筵の幕の向こうから、地面を杖で叩くような打音や、弦を弾くような音などが入り混じって聞こえてくる。(トン、トトン。ベン、ベベン) やがて、トコヨミが現れて竹竿を振り上げると、ゆつくりと筵の幕が開き、それにつれて、それぞれ異なる半面を掛けて音の出る物を持った筵たちの姿が見えてくる。入れ違いでトコヨミの姿は消える。

筵たち

子ゆえの闇に 迷いつつ  
道なき道を 踏み分けて  
巡り巡るや 何十里  
さても果てなき 旅路かな

空間に響く音と語りの中、蛤が登場して筵の森を彷徨う。

筵たち

あれに見ゆるは 心臓か  
低く波打つ その音に  
混じりて鳴くは ほととぎす  
血を吐くばかりに 叫ぶなり

さてその次は 肺臓か  
煙を吸っては むせ返り  
慌てて吐いては 反り返る  
それでも乱れぬ 艶姿

角を曲がれば 腎臓か  
濁り川から 貝すくい  
津々浦々に 運び行く  
蚕豆ならぬ まめ男

脇から覗くは 脾臓っ子  
りんぱりんぱと 叫びつつ  
光琳ばかりが 絵師じゃなし  
北斎写楽も くわえ込む

肝心かなめの 肝臓に  
吸い付くはだえの 脾臓は  
闇に紛れて 見当たらす  
気付けば喉から 胃袋へ

大腸小腸 はや過ぎて  
膀胱肛門 巡れども  
どこがどこやら 知れぬまま  
天を仰いで 立ち尽くす

そこに、編笠を被って頬かむりをした別の男が通り掛かる。

蛤 男 蛤

男 蛤 男 蛤 男

ああ、船頭さん。いったいここはどの辺りでしょう？  
どの辺りとは、なんのこったい？  
いえね、さつき舟を降りてから、ふらふら歩いてみたけれど、なんだかどこも似たように薄暗くて、どこがどこやら皆目わからず、途方に暮れていたんです。どっちへ行けば、店なり宿なりある場所に出られるんでしょう。  
なに寝惚けたこと言ってるんだ。ここは船の中じゃねえか。  
そんなら船頭さん、あたしや、まだ川を下っているんですか？  
下るも上るもねえもんだ。いってえどここが川なんだ。  
でも船頭さん、たった今舟の中だと。  
船はフネでも白河夜船、寝てる間に山の中さ。

男、編笠を取って頬かむりを外す。

蛤 兵衛

もしや、おまえは頓兵衛どんか？  
それがどうした。

頓兵衛

頓兵衛どんが、どうしてここへ。  
(股ぐらを指しながら)おまえのここが呼んだんじゃねえのか？



蛤　なにがなにやら…。

頓兵衛　どうだ、望みどおりに抱いてやろうか。

蛤　あたしを捨てて、なにを今更。

頓兵衛　さんざん男を渡り歩いて、捨てられたもねえもんだ。老いさらばえて痩せかけた、腐れ婆アのその身体、抱いてやろうと言っているのだ、四の五の言わず、脱げばいいのさ。

頓兵衛、蛤の着物に手を掛かる。

蛤、その手を振り払って逃げ出すが、頓兵衛は追い掛ける。

筵たちが再び騒ぎ出し、その音と語りに乗って二人は空間を巡る。

筵たち

手籠めにせんと　頓兵衛の

伸ばした腕を　振り払い

その手は桑名の　蛤は

弱りし足を　引き摺って

道なき道を　逃げ惑う

蛤、逃げる中で、筵たちにしがみ付きながら助けを求める。

蛤

どうぞお助け下さいませ。どうぞお助け下さいませ。

蛤は、いくつかの筵に袖にされるが、何番目かの筵が声を聞き入れ、

いくつかの筵たちと共に頓兵衛を取り囲む。

これより鳴物入りの立ち廻りとなり、よろしくあって、頓兵衛は、筵に  
囲まれ姿を消す。

蛤

（最初に手助けした筵に）どなたかは存じませんが、地獄に仏とは、まさにこのこと。本当に助かりました。ありがとうございます。この身ひとつの旅なので、お礼とあって何もなければ、お名前だけでも聞かせてください。この先ずっと拝みます。

名乗るほどでもございません。

いえいえ、それでは済みませぬ。せめて一言お名前を。

それほど名前が聞きたいと。

はい。どうぞお名乗り下さいませ。

邪魔になって捨てた我が子に、いまさら名乗れもないもんだねえ。

そんなら、おまえは…。

たった独りで山寺に、捨てられました捨吉さ。

ええ…。

腹が減って干死にしそうじゃ、おつかさん、飯をくださいえ。

………。

その筵

蛤

その筵

蛤

その筵

蛤

蛤

筵たち  
別の筵  
他の筵  
違う筵  
また筵  
おつかさん、飯をくださいせえ。おつかさん、飯をくださいせえ。  
(手を伸ばし)耳を千切って、喰わせてくださいせえ。  
(手を伸ばし)鼻をもぎって、喰わせてくださいせえ。  
(手を伸ばし)指へし折って、喰わせてくださいせえ。  
(手を伸ばし)まなこ抉って、喰わせてくださいせえ。

筵たち、あちらこちらから粘液のごとく蛤に絡み付く。  
蛤、追いつがる筵たちを、なんとか逃れて客席の方へ行きかける。  
筵たち、その蛤を引き寄せるごとく手招く。  
蛤、連理引となり、本舞台に引き寄せられ、もがきながら失神する。  
筵たち、気を失って倒れた蛤を残して掻き消える。

雨の音——。

向こうから、提灯を持って呑兵衛がやって来る。

呑兵衛、蛤に突き当たり、手で様子を探る。

呑兵衛  
まさしく女……。 (息をたしかめ) これお女中、しつかりなされませ。

介抱しようとする、雨音が強くなる。

呑兵衛  
こりや本降りになってきたわ。店に運んで、(橋の頭) 手当をしようか。

雨音が激しくなる中、二人を筵の幕が隠していく。

## 五、腹掛峠 茶屋へそや

筵の幕が開くと、そこは腹掛峠の茶屋へそやである。

蛤が、食べ終わった丼を前に座っており、お伝が傍らに立っている。

お伝  
どうだい、もう一杯いるかい？

蛤  
いえ、もう結構です。ご馳走様でした。

お伝  
そうかい。そんならもう勧めないが、素敵に平らげたね。

蛤  
お恥ずかしゅうございます。

お伝  
なあに無理もないさ。うちの人の話じゃ、息も絶え絶えで倒れてたそうじゃないか。よほど喰うや喰わずだったんだらうね。

蛤  
それすらはつきり思い出せませんが、お蔭様で生き返りました。

お伝  
まあ、ゆつくり茶でも飲むがいいや。(注ぐ)

蛤  
はい、ありがとうございます。

蛤、お茶を一旦口にするが、熱いらしく吹いて冷ましている。

呑兵衛 (出つつ)こいつア、すっかり寝坊した…(蛤を見て)おう、目を覚ましたな。

お伝 ちようど朝飯が済んだところさ。

呑兵衛 そいつアよかった。ゆんべはだいぶうなされていたようだが、飯が食えれば一安心だ。

お伝 ああ、そうだよ。どうやら血の気も戻ったようだし、後はゆっくり休めばいいのさ。

蛤 そんなら夕べはうなされて…。

呑兵衛 ああ。なんだか夜っぴてうなっていたな。

お伝 うん、ずいぶんと怖い夢でも見てたんだろう。

蛤 ……。

呑兵衛 まあ、気にするな。おい…(茶碗を掲げる仕草)

お伝 あいよ。

お伝、呑兵衛に茶を注ぎ、井を持って去る。

呑兵衛 (蛤が吹いているので)何やってんだ？口とんがらがして。

蛤 猫舌なもんですから。

呑兵衛 妙なことを言う。なんだいそりや。

蛤 ああ、その…、お茶が熱いもので冷ましております。

呑兵衛 これが熱いたア、変わった舌もあるもんだ。

蛤 (吹きながら呑兵衛の顔を眺め)…昨日は、お助け下さいましたようで、ありがとうございました。

呑兵衛 なんのこたアねえさ。…なんだ、俺の頭に皿でも載ってるか？

蛤 いえ、前にどこぞでお会いしたかと…。

呑兵衛 よく言われるわ。

蛤 ええ？

呑兵衛 どこにでもある顔なのさ。お生憎だが、行き倒れに知り合いはねえやな。

蛤 はあ…。

呑兵衛 そら、いい加減冷めたらう。

蛤 はい…。(飲み) ああ、美味しい。

呑兵衛 美味しいかい？

蛤 ええ、ほんとに美味しいお茶ですなえ。

呑兵衛 そうだろうよ、へそやの臍茶は特上なのさ。

蛤 へそや…？

呑兵衛 ああ、そうか。夜中にここへ連れ込んで、ついさつき起きたばかりじゃ、右

も左もわからねえなあ。ここは腹掛峠の茶屋で、へそやってんだよ。まあ、峠にあるってえのもあるが、酒も肴も団子も美味しい、てめえで言うのもおこ

がましいが、街道一のお茶屋様さ。中でも臍茶は名物だ。極上の胡麻節を使うのも勿論だが、何が美味いって水が違う。山深く清滝口まで分け入って、源泉の井戸から湧き水を汲んで来て、よく寝かせて使っているのさ。

なるほど、どうりで美味しいわけです。そう言ってくれたらありがたいえ。酒も料理も水が決め手だ、その手間は惜しまねえが大切だが、ここんとこどうにも悩ましい。

なんですか？

なあ…。ちよいと前までは、いつ行ってもこんこんと沸いてたもんだが、ここんとこすつかりちよろちよろで、ひと桶汲むにも手間が掛かり、どうにも参っているところさ。

それはお気の毒なことですね。なおさら大事に頂きます。(ゆっくりと一口飲んでから)つかぬことを伺いますが、この辺りで、なにか争いごとが起きているんでございませうか？

なに言ってるんだい。起こっているどこじやねえだろう。釣鐘池を埋め立てて工場を建てると意気込む天狗さんたち一族と、なんとか止めてえ河童さんが、どっちも引かれぬ意地づくで、一触即発の綱渡りさ。お前さん、どうやら旅のお方らしいが、物知らずにもほどがあらあ。

はあ。まったく存じませんでした。

ずいぶん気楽な一人旅だが、いったいどこに行くつもりだ？

決まった当てはございせんが、幼い頃に生き別れた倅を尋ね歩いているのです。

なるほどそうかい。まあ、いずれすぐには見付かるまいから、あんたが良ければ、この店で寝泊りしながら探せばいいさ。

そんならここに置いて下さりますか？

もちろんただじゃあ置かねえよ、下働きをさせるがいいか？

いいも悪いもございせん。水汲みでも薪割りでも致しますから、どうぞ置いてやってくださいまし。

夜の座敷に出しても承知か？

ええ、もう何でも致します。

そんなら決まりだ。まあ、ゆっくりと探すがいいや。

はい、ありがとうございます。

蛤、居住まいを正してお辞儀をしようとしてふらつく。

おっと、どうした。

気が落ち着いたら、なんだかめまいが…。

そりゃあいけねえ。飯は食っても昨日の今日だ、上で少し休むがいい。

じゃあ、そうさせて頂きましょうか…。

(奥)おい、お伝。

あいよ。(出る)

蛤

呑兵衛

蛤

呑兵衛

蛤

呑兵衛

蛤

呑兵衛

蛤

呑兵衛

蛤

呑兵衛

蛤

呑兵衛

蛤

呑兵衛

蛤

呑兵衛

蛤

呑兵衛

蛤

呑兵衛

お伝

香兵衛 まだ少しふらつくようだ。上に床を取ってやんな。  
お伝 はいはい。

香兵衛 俺は薬草でも摘んでくるから、客が来たら頼んだよ。  
お伝 任せておきな。

香兵衛 そんならちよつと、行ってこようか。

お伝、出て行く香兵衛を見送ってから蛤の手を取る。

お伝 それじゃあ上に、行きましようかね。

蛤 重ね重ねお世話になります。

お伝 お客の世話が、仕事だよ。

二人、去る。——誰もいない店。

ややあつて、胡弓が入ってくる。

(入りつつ)おはようさん。

……………

(奥に)お伝さん、あたしだよ。

……………

(もう一度大きく)お伝さ〜ん。

(上の方で)はいは〜い、今行きますよ。(出て)ああ、胡弓さんかい。どうもいらつしやいまし。

もう朝はやつてる？

いや、悪いが今朝はまだなんだ。なんだかんだで仕込めなくてさ。

そうなんだ…、残念だなあ。

毎日来てもらってるのに、ほんとに申し訳ないねえ…。そうだ、いいものがあつたんだ！

なあに？

いやね、ちようどこないだお土産にもらった珍しい食べ物があるからさ、お代はいいから試してごらんな。

へ〜え、いったいなんだろ？

うん、なんでも舶来物らしいんだがね、コレステロールとかいう練り物なんだよ。胡弓さんなら知ってるだろう？

ううん。

物知りのあんたが知らないんじや、こりやとびきりの珍味だね。ちよつと待つとくれ、持つてくるから。(引つ込む)

(教則本を出して音読)「ススメ、ススメ、ヘイタイススメ。スズメ、スズメ、キタキリスズメ。ヌスメ、ヌスメ、アシオトヌスメ。ムスメ、ムスメ、ハコイリムスメ…」

(皿にキリタンポのような物を載せて出て)はい、これがそうさ。

お伝

胡弓

お伝

胡弓

お伝

胡弓

お伝

胡弓

お伝

胡弓

お伝

胡弓

お伝

胡弓

お伝

胡弓

お伝

胡弓

お伝

蛤

お伝

香兵衛

お伝

香兵衛

お伝

香兵衛

胡弓 うわあ、美味しそう。じゃあ遠慮なく頂きます。(かじり付く)  
お伝 どうだい？

胡弓 見掛けは少し硬そうだけど、口の中でトロつと溶けて、なんとも言えない美味しさだなあ。うん、今まで食べたことのない味。

お伝 そりゃあ良かった。まだ向こうにあるからさ、良かったらお替りしとくれ。ありがとう。

お伝 でも、かなり精が付くらしいから、食べ過ぎると後が怖いとき。(にやり笑つて) 天狗さんには内緒だよ。

胡弓 それなら尚更食べさせたいなあ。  
お伝 なに言ってるんだい、ただでさえ絶倫なお方じゃないか。

胡弓 それが最近そうでもなくて…。  
お伝 どうかしたのかい？

胡弓 お伝さんだから言うけどね、ここんとこ身体の具合が良くないんだ。  
お伝 そんな風には見えないけどねえ。

胡弓 ああいうお方だから、人前ではそういう素振りを見せないけど、身近にいるとわかるんだ。ここんとこ顔色も悪いし、あんまり食欲もないみたいで、夜も時々うなされてるんだ。恥ずかしながら、あっちの方もさっぱりで…。

お伝 そうかい。じゃあこんな珍味じゃなくてさ、ちゃんと薬でも飲ませた方がいいんじゃないのかい。

胡弓 うん。でも、なんの病か知れないから、薬の処方がわからなくて…。  
天狗 (入って) やっぱり、ここだったか…。

お伝 おや、今日は早いぶん早いね。悪いけど、支度がまだなんだ。  
天狗 腹は減ってない。へモグロくれ。

お伝 朝から飲むのかい？  
お伝 ああ、瓶ごと持ってきてくれ。

お伝 はいはい。(去る)  
天狗 ああ。(教則本を指し) こんなの、おまえには簡単だろ。

胡弓 うん、お茶の子。  
天狗 奴らも、ちゃんとやってるか？

胡弓 ぼちぼちね。  
天狗 まあ、せいぜい仕込んでやってくれ。

お伝 任せといて。  
(赤い液体の入った瓶と湯呑を持って出て) はい、へモグロ瓶。(置いて去る)

天狗は、湯呑に注いで飲む。胡弓は、心配そうに見ている。

天狗 (ぐいと飲み干し) 胡弓、おまえも飲め。

胡弓 あたしはいいよ。

天狗 つれないこと言うな、つきあえ。

胡弓 じゃあ、ちよつとだけ。

天狗 うん…、(注いで) さあ。  
胡弓 いただきます。(飲む)

天狗、その姿をしばし見詰めてから抱き寄せる。

胡弓 どうしたの？

黙って飲め。

天狗 はい…(飲むが、強く抱き締められるので)ちよつと痛いよ。

胡弓 こうしていると落ち着く。

天狗 また眠れなかったの？

胡弓 枯葉は落ちても新芽が出る。

天狗 なあに？

胡弓 時代は進むということだ。

天狗 ああ…。

胡弓 天下は統一せねばならん。そうだな？

天狗 …うん。

胡弓 こんな夢を見る。

天狗 夢？

胡弓 ああ…。俺の鼻が折れて川に落ちる。拾おうとして川に入ると、そこは崖っぷちに変っていて、足を滑らすと谷底に落ちてしまうから、用心してゆっくり歩こうとするんだが、ほんの少し進むと足が吊って動けない。

天狗 それで？

胡弓 なんとか手を伸ばして足を揉もうとすると、その拍子に身体がぐらりと揺らいで谷底に落ちていく。そんな夢だ。

天狗 怖い夢だね。

胡弓 ああ…。でも、いつも落ちる途中で目が覚めるんだ。だから怖いけど、少し気持ちがいい。その間だけ空を飛んでるみたいだな。

天狗 そう…。

胡弓 俺に出来ると思うか？

天狗 なにが？

胡弓 天下統一。

天狗 (ゆっくりうなずき)…きつとね。

胡弓 (頭を撫でて)いい奴だ。さあ、もう行け。

天狗 え？

胡弓 少し独りで飲みたい。

天狗 わかった…。(去りかけ) 気を付けてね。

胡弓 ん？

天狗 身体…。(去る)

天狗、胡弓を見送ってから、へモグロを瓶ごと飲んで手を叩く。

お伝 (出つつ) はいはうい。ご用かね？  
天狗 (瓶を振って) もう一本持ってきてくれ。  
お伝 まだ朝なんだからさ、もうおよしよ。  
天狗 いいから持って来い。  
お伝 わかりましたよ。(去る)

天狗、残ったへモグロを瓶ごと飲み干す。

お伝 (瓶を持って戻り) おやおや、そんな一度に呑んだら身体に毒だよ。  
天狗 (にやりとして) 毒と薬は裏表さ。お伝、おまえもやれ。(湯呑を差し出す)  
お伝 勘弁してくれ、まだ仕込みの途中なんだからさ。  
天狗 喰えねえあまだ。

お伝が残った皿などを片付けていると、蛤が顔を出す。

お伝 おや、どうした？  
蛤 ちよいと廁へ…。  
お伝 ああ…、そっちだよ。  
蛤 ありがとうございます。  
天狗 (蛤を見てお伝に) 誰だ。  
お伝 旅のお方さ。(天狗を指して) …天狗さん。

蛤、しばし天狗の顔を見入ってから、黙って会釈をして去る。

天狗 見掛けない顔だな。  
お伝 うちの人が拾ってきたんだよ、行き倒れていたんだと。  
天狗 ふうん、なかなかいい女だ。  
お伝 なに言っただい、年増じゃないか。  
天狗 若い女は、もう飽きた。  
お伝 なんでもいいが、暫くうちで預かったんだ、余計な手出しはやめとくれよ。  
天狗 仕込みがあるなら、とつとと失せろ。  
お伝 はいはい。(皿などを持って去る)

蛤、戻ってくる。

天狗 おい。  
蛤 はい。  
天狗 酒は飲めるか？  
蛤 ええ、まあ少しは…。



天狗 (手招き)ちよつと付き合え。  
蛤 はい…。

天狗、目と手で指図して蛤を座らせ、湯呑に注いで差し出す。

蛤 頂きます。(ぐいと飲み干して戻す)

天狗 うむ、いい飲みっぷりだ。(湯呑を差し出し) 注げ。

蛤 はい。(湯呑に注いで差し出す)

天狗 (ぐいと飲み干して)どうだ、もうひとつ。(湯呑を掲げる)

蛤 それなら、もうひとつだけ頂きましょう。

天狗 よし。(湯呑に注いで差し出す)

蛤 では…。(ぐいと飲み干し)ご返杯致しましょうか？

天狗 うん、まあおう。

蛤 では、ご返杯。(注いで差し出す)

天狗 (ぐいと飲み干して)よし、もう一杯。(注ごうとする)

蛤 もう結構でございます。

天狗 行ける口だろ、遠慮はいらん。毒を喰らわば、皿までよ。(注いで差し出す)

蛤 そういうことなら…。(ぐいと飲み干し)はて、いささか酔いが廻りました。

天狗 飲めば酔うのが酒の常だ。酔わぬ酒など欲しくはないわさ。

蛤 なるほど、そうでございますねえ。

天狗 話せるやつだ。上戸ならば、さしずめ踊りも嗜もうよな？

蛤 ほんの一口齧ったぐらいの下戸でございます。

天狗 (笑って)その下戸が所望だ。よし、まず俺がやってみせよう。(少しよろけながら立ち上がり、都々逸的な節を付けて)浮かれ鳥が、ねぐらへ帰り、百舌

蛤 が枯れ木で、泣き寝入り。(と歌いながら踊る)…さあ、やってみろ。  
はい…。

天狗 (手を叩いて歌う)浮かれ鳥が、ねぐらへ帰り、百舌が枯れ木で、泣き寝入り。

蛤、天狗の真似をしながらも、天狗より上手に踊る。

天狗 ははは、見事な下戸だ。もう少し、続けてみせろ。(手を叩いて歌う)迷い雀が、お宿を探し、とんびが廓に、身売りする。

蛤、さらに上手に踊る。

天狗 (満足そうに見て)ははは、そこまで下戸だと上戸のうちだ。今度、俺の陣屋に遊びに来て、若い衆にも見せてやれ。

蛤 お恥ずかしゅうございます。

天狗 ははは、恥らう姿も気に入った。よし、今度は自分で歌ってやってみせろ。

蛤 はい。浮かれ鳥が、ねぐらへ帰り、百舌が枯れ木で、泣き寝入り…、

歌いながら踊る蛤を、満足そうに天狗が手を叩きながら見ている中、筵の幕が二人を隠していく。

## 六、水月堂裏手 墓地

幕の向こうから虫の音が聞こえてくる。どうやら夜更けのようだ。やがて筵の幕が開くと、そこは水月堂の裏手にある墓地である。

奥に随石と呼ばれる二つの大きな石があり、その前で三笑が祈っている。

しばらくして、向こうから勘太がやって来る。

そして、三笑の姿を見付け、少し離れて祈る三笑を見ている。

そんな勘太の後ろから、足音を忍ばせて甚兵衛が出て様子を窺っている。

虫の音が高まり、それに混じって古い扉が軋むような歪んだ音がする。

ヤブコウモリが鳴いているのだ――。

やがて、祈りが終わったのか三笑が立ち上がる。

甚兵衛、素早く草叢に隠れる。

(三笑に近寄りつつ)こんばんは…。

あれ…、勘太さんですか？

(うなづく)

こんな夜分に珍しいですね。

なんだか眠れんです。

そんな夜もあります。

なんの音で？扉の軋むような…。

ヤブコウモリです。このところ昼間も飛び回っていて、しきりに鳴くんです。

真っ白なシヨウバミの花も、今年は赤み掛かっているし、なんか良くないこと

とが起こりそうな気がします。

そうですか…。

なにか悩みでもあるんですか？

え？

眠れないって…。

ああ…、その…、睡蓮は…、今もよく？

ええ、よく来てくれますよ。

ああ、そうですか…。実は…、睡蓮は、わたちの妹なんです。

知っています。前に睡蓮ちゃんから聞きました。

そうですか…。それなら、これもご存知かも知れませんが、幼い頃、親父が

お袋と別れて天狗さんたちの仲間に入るようになり、まもなくお袋が亡くなって、それ以来、睡蓮は親父だけでなく付いて行つたわつちも恨んでいるみたいで、たまにすれ違った時も、口を利いてくれません。

三笑 ああ…。

三笑 まあ今までは、それも仕方がないと思つていましたが…、近頃なにかと気になりだして…、夜もなかなか眠付けぬ始末…。

三笑 なるほど、そうでしたか…。

三笑 天狗さんが出した立ち退きのお触れ、ご存知でやんしょう？

三笑 ええ、ひどいお触れです。

三笑 お触れが出たからといって、おそらく河童の仲間たちは、すぐ立ち退きはしないでしょう。

三笑 たぶん、そうでしょうね。

三笑 そうなつたら、天狗さんは強硬な手段に打って出るはず。相当に手荒い事もするでしょう。睡蓮は昔つから一途なところがあつて、こうと決めたら曲げない子なんです。だから、もしこのまま事が進むと命を落としかねない。わつちは、睡蓮をそんな目に遭わせたくないんです。

三笑 ……。

三笑 それで…（手紙を出し）わつちなりに、ない知恵を絞つて、なんとか睡蓮が生き延びられるよう、いくつか手を考えて、こうして書いてみたんです。

三笑 そうですか…。

三笑 これを、睡蓮に渡してやって欲しいんです。

三笑 （受け取り）わかりました。必ず渡します。

三笑 ありがとうございます。よろしくお願いします。

三笑 はい、たしかに。

三笑 では、失礼します。（去る）

三笑、勘太が去るのを見届け、手紙をしまう。

甚之助、草叢から顔を出して小さくうなずき、足早に去る。

ヤブコウモリの声が高まる――。

三笑は、ゆっくりと目を閉じてなにか念じる。

草木がそれに共鳴して、まるで笛の音のように響き合う。

三笑、懐から扇を出し、その音に合わせて静かに舞を舞い始める。

しばらくして、向こうから蛤がぼんやりと現れ、三笑の舞に気付く。

そして、ゆっくり近付いてそれを見ている。

やがて、舞い終わった三笑は蛤に気付いて軽く会釈する。

蛤

（会釈を返し）見事な舞でございました。いえいえ、下手の横好きです。

三笑

蛤 そんなことはございません。あたしも昔、ほんの少し踊りを齧っております。それから、物腰や手付きでわかります。

三笑 それなら尚更お恥ずかしい。

蛤 なにおおっしゃいます。心にじいんと染みました。一体どういう舞ですか？古くから伝わる鎮魂の舞です。この土地に暮らす私たちを守ってください。先祖様に捧げるため奉納してきた舞なんです。

三笑 ああ、そうだったんですか…。気持ちが悪く落ち着くわけですねえ。

蛤 失礼ですが、旅の方ですか？

三笑 ああ…、はい、そうでございます。ひよんなことから、峠のへそやさんにお世話になっておりますが、お店のお伝さんから、願掛けをするなら、まずこちらにお参りするがいいと言われ、こんな夜更けに参りました。

三笑 それはご苦労様です。

蛤 それで、御本尊はどちらに？

三笑 この土地では、ご先祖様の霊を拝みますので、お像を祀った社はないんです。あちらの奥に大きな石が並んでいますね。

蛤 ええ。

三笑 あれば、ご随石といって、ご先祖様の霊が眠っている神聖な場所なんです。お参りされるなら、どうぞあちらに。

蛤 では、拝ませて頂きます。

蛤、会釈して奥に進み、ゆっくりと静かに拜んで戻ってくる。

蛤 ありがとうございます。ご迷惑しました。（会釈して去り掛け、ふと止まり）つかぬことを

三笑 伺いますが、こんな長閑な処でも、やはり争いごとが？

蛤 争いごと？

三笑 はい。へそやさんで聞いた話では、なんでも天狗さんたち一族と、河童さんたち一族とやらが、激しく争っているとのことでしたから…。

三笑 ああ、そうです。残念ながら、本当です。

蛤 失礼ですが、あなたはどちらなんでしょう？

三笑 僕は、どちらでもありません。だから、ここで墓守を任されているんです。はあ…。

蛤 天狗さんも、河童さんも、もともとは同じ一族ですから、ご先祖様だつて一緒なんです。それが今では、敵味方。おかげで、ご先祖様も安らかに眠れぬ様子で、このところ不吉な兆しが多いのです。もしいくさでも始まったら、ご先祖様のお怒りに触れ、おそらく命の水も涸れ、それこそみんな共倒れでしょう。争いが収まることを祈るしかありません。

三笑 そうだったんですか…。なんとか仲直りさせたいものですねえ。

蛤 あ…、では、もしかして願掛けも？

三笑 はい。よそ者ながら気に掛かり。

蛤 それは有り難うございます。僕も毎日気掛かりで、寝付けぬ夜が増えました。

蛤

もしお力になれるなら、なにかお役に立ちたいけれど、祈る他には思い付きません。ここで会ったも他生の縁、お知恵があれば貸してください。

三笑

そうですね…。(しばらく考えて) 幼い頃に亡くなった母から、よくこんな話を聞かされました。お伽噺かもしれませんし、お役に立つかはわかりませんが、それでよければお話しましょう。

ええ、どうぞお話しくださいませ。

三笑

この土地で暮らしている一族は、身体はどこかに毒と薬の玉が一つずつ埋まっている。毒の方は、「ほむらだま」という真つ赤な玉で命を落としかねない猛毒だ、薬の方は、「しずめだま」という緑の玉で万病に効く妙薬だ。その玉は、ふだん奥深く入り込んで、めったに出てくることはないし、死ぬまで出ない方が多いが、なにかのはずみで耳から零れることがある。万一、そんなことがあったとしたら、その玉を大切にしまっておけ。きっと役立つ時がある。——そんな話でした。

蛤

そうですか。ありがとうございます。よく憶えておきましょう。

三笑

すみません、これぐらいしか思い当たらず。

蛤

どういたしました。では、そろそろ失礼致します。

三笑

夜道は足元が滑りますから、どうぞお気を付けて行かれませ。

蛤

はい。ご親切にありがとうございます。(深々と一礼して去る)

三笑、蛤を見送って再び扇を手に舞おうとすると、睡蓮がやって来る。

三笑

(ふと睡蓮の視線に気付き) ああ、睡蓮。

睡蓮

またお稽古？

三笑

まあね。下手くそだから。

睡蓮

そんなことないよ。

三笑

(首を振り) まだまだ。こんな舞、お祭りで見せたら恥ずかしいよ。

睡蓮

(くすつと笑う)

三笑

なに？

睡蓮

ほんと三笑は、お祭りが好きだね。

三笑

睡蓮だって好きだろ、お祭り。

睡蓮

うん。でも、三笑には負ける。

三笑

僕はね…、お祭りも好きだけど、たぶん出し物を考えたり、稽古をしたりすることの方が好きなんだと思うな。

睡蓮

へへえ、そっか…。

三笑

そうしてると、なんかホッとするんだよ。

睡蓮

そう。

いつのまにヤブコウモリの鳴き声が静まっている。

三笑

睡蓮に会うずうつと前、うくと小さい頃だけど、僕、いじめられてたこと

があるんだ。

そう。

ほら、胃とか腸と違ってさ、三焦っていうのはよく役割がわからないだろ。だから、みんなから「役立たず」って言われて胆石とか投げられてたんだ。そうなの？

うん。僕も、その頃は自分の役割なんてよくわからなかった…。でもね、少し大きくなった頃、虫垂のおじさんから教わって初めてわかったんだ。

へーえ、どんな役割だったの？

役割は…、ないんだ。

ないって？

いや…、本当はあるんだけど…、ない。

よくわかんないよ。

うまく説明できないけど…、誰にでもはっきりわかる役割はない…って言うか…少なくとも今はみんなみたいに役に立つ仕事はしていない。わかる？ なんとなくだけど…。

でも、虫垂のおじさん言ってた。世の中には、役割のわからないことなんてたくさんある。でも、存在することが役割みたいなものもあるって。

ああ…。

役割なんてあってもなくても関係ない、おまえがいることが大切なんだ、そして気が付いたらそれが役割になってるような大人になれって。

ふうん、そっか…。

でもね、僕はまだまだそこまで悟りが開けない。どっかでもまだ役割を探してるんだ。だから、出し物を考えたり稽古をしたりしてると、なんかホッとするんだらうね。

そう。

出し物は決まったの？

まだ…。でも、奇術はもうやめにする。

そう。

もつと静かに祈りを捧げるような出し物を考えてたんだけど、そうも行かなくなってきた…。

どうして？

だって、ほら、ひどいお触れが出たじゃない。静かに祈る気分じゃないよ。出来ることなら、天狗たちを呪い殺してやりたいぐらいなんだから。

再び、ヤブコウモリが騒ぎ出した。

睡蓮の気持ちはよくわかるけど、無茶したらだめだよ。

わかってる。

(手紙を出して)…これ。

なあに？

睡蓮

三笑

睡蓮

三笑

睡蓮

三笑

睡蓮

三笑

睡蓮

三笑

睡蓮

三笑

睡蓮

三笑

睡蓮

三笑

睡蓮

三笑

睡蓮

三笑

睡蓮

三笑

睡蓮

三笑

睡蓮

三笑

睡蓮

三笑

睡蓮

三笑

睡蓮

三笑

睡蓮

三笑

睡蓮

三笑

睡蓮

三笑

睡蓮

三笑

睡蓮

三笑

睡蓮

三笑



甚兵衛　こんな日は、水でもぶつ搔いて喰いてえもんだな。  
新之助　違えねえ。ついでにここいらのぶら下がりもんでもぶつ搔きてえぐれえだ。  
甚兵衛　品のねえこと言うない、こん畜生め。女子衆が前にいらあ、ちったあ慎め。  
新之助　なんのあいづが女なものか。緋牡丹てえば彫りもんじゃねえか。むしろあつちらなんかより、どんだけ男か知れねえよ。  
甚兵衛　…な。こつちの方が、よつほど弾む。  
緋牡丹　ほんとだねえ。  
新之助　やっぱり普段の話にやあ上等語は向かないのさ。  
胡弓　（本を手に入ってきて）上等語がどうしたの？  
新之助　え…いやさ、しつくり来ねえって話してたんだよ。  
胡弓　そうかな…、随分うまくなってきたよ。  
新之助　そうかい？  
甚兵衛　ああ、えらいえらい。  
緋牡丹　胡弓に褒められたって嬉しかねえや。（科を作って）どうせお褒めを貰うなら、緋牡丹ちゃんに貰いたい。  
甚兵衛　（乗ったふりをして）そんならわちきが褒めようかえ。  
緋牡丹　褒めてくれ、褒めてくれ。  
甚兵衛　さてこそ立派な…、（甚兵衛を見やって、振り返り）新之助さま。  
緋牡丹　おい。俺だ、俺だ。  
甚兵衛　（向き直り）野暮な男は…、（ぶいと横向き）好かぬわいの。  
緋牡丹　てやんでえ、こんちきしよう。  
甚兵衛　まあまあ怒るな、振られ男。  
新之助　くそつ、面白くねえ。  
甚兵衛　それにしても、胡弓は本が好きだな。いつもなんかしら読んでやがる。  
新之助　ああ…。今度は何を読んでるんだい？  
緋牡丹　ああ、これかい？これは、桃太郎だよ。  
胡弓　こないだも桃太郎じゃなかったかい？  
緋牡丹　好きなんだよ。  
胡弓　そんな話のどこが好きなんだい？  
緋牡丹　黍団子のところだよ。みんなにお団子をあげて家来にしていくんだよ。  
胡弓　ああ、あつたねそんなところが。  
緋牡丹　うん。あたしにとつては、そこが山場さ。  
新之助　とても山場には思えないがねえ。  
緋牡丹　それにしても桃太郎はいいよな、団子ぐれえで手なずけられて。  
新之助　なんだいそれ？  
甚兵衛　いやさ、河童の野郎たちも、たらふく胡瓜でもやって寝返ってくれるなら楽だつてことだよ。  
新之助　それで済むならとつくにやつてら。  
甚兵衛　そうなんだよな…。池を埋め立てるつたつて、やつら邪魔するに決まつてるし、そう簡単には行かないからな…。



緋牡丹 そうだね…。

新之助 まあ、とにかくみんなで知恵を絞って…。そういや、しばらく勘太を見掛けねえが、どうしたんだ？

緋牡丹 そうなんだよ。あたしも心配してたところなんだ。

甚兵衛 どうせまた風呂にでも入ってるんだろ。長えからな、あいつの風呂は…。

新之助 おいおい、いくら長風呂だったって二日も掛けて入らねえだろ。

緋牡丹 そうだよ、なんかあつたんじやないかねえ。胡弓、あんたならなんか知ってるんじゃないのかい？

胡弓 あたしは知らないよ。本を読むので精一杯さ。

おまん (奥の方から声のみ) 天狗様のお成り…。

甚兵衛 やべえ、こんな格好じゃ叱られちまうぞ。

それぞれに、はだけた着物などを慌てて直す。

おまん (声のみ)お成り…。

天狗が入ってくる。

一同 お帰りなさいませ！

天狗 うん。え、先日出したお触れに対する河童どもの反応を、お忍びで視察して廻った結果、想像以上に反対派が多かった。

緋牡丹 まあ、そうでしょうねえ。

天狗 むしろ河童の仲間ども全員が反対だと言っても過言ではない。

甚兵衛 しぶてえ奴らです。

天狗 そこで、この度、計画を変更することにした。名付けて、酔っ払い作戦！

新之助 酔っ払って、酒でも飲ますってんですか？

天狗 酒ではないが、まさに河童族の神経を酔わせて刺激するのだ。

新之助 酔わせて刺激…。

天狗 うん。奴等が、いまだに「ご先祖様、ご先祖様」と拝みたて、自然の恵みだけで暮らそうなどと時代遅れのことを言っているのは何故かと言えば、感覚

が未発達で刺激を知らないからだ。そこで、河童どもの鈍った感覚を逆に酔わせて刺激を与え、進歩的な考えに変えてやるのさ。

新之助 そのために何かを飲ませるわけですね。

天狗 まあそうだが、やつらは河童だから液体には敏感だ。しかし固型のものには意外と弱い。去年も、俺の植えた紅天狗竹を食べた河童が何匹か死んでいる。なるほど。

新之助 やつらの大好物といえは胡瓜だが、天然の胡瓜を作り変えるのは、ちと無理だ。じゃあ、やつらの中好物といえは…？

胡弓 カッパ巻き！

天狗 そのとおり！やつらが祭の準備に気を取られている隙を狙って、大量の痺れ

巻きを喰わせるのだ！

一同、大きく拍手。

**天狗** この新たな作戦によって、再開発は進むだろうが、俺の偉大な計画を確実に成功させるためには、わが天狗一族の固くて強い団結が不可欠である。おっしゃるとおりで。

**甚兵衛** 時代遅れの河童どもを配下に入れ、我ら先進的な天狗一族によって天下統一を果たし、安楽な世の中を到来させるといふ高邁な目的を達成する為には、小さな裏切りも見逃すわけにはいかんのである！  
御意ごもつとも。

**天狗** 坊主に化した狸めは、狸汁にするまでよ。  
いかにも。

**甚兵衛** (にやりと笑って手を叩き)おまん…。

**天狗** (顔を出し)お呼びで。

**天狗** 狸を連れて参れ。

**おまん** かしこまりました。(引っ込む)

**天狗** 胡弓、なにか弾け！

**胡弓** はあい。

胡弓、胡弓を弾き始める。

おまんが、猿轡をされ上半身裸で縛られた勘太の縄を引いて出てくる。

勘太の上半身には、いくつもの引っ掻き傷が付いている。

**天狗** おまん、狸の芸が所望じゃ。

**おまん** はい、お見せいたしましょう。

おまん、胡弓の弾く曲に合わせて、手元の盆に載っているいくつつかの小さな壺から様々な物を取り出して、勘太の傷口に塗り込んで行く。

**おまん** まずは、狸の塩漬け。(塗る)

**勘太** (うめきながら身をよじる)

**おまん** おほほほほ、まだ塩味が足りんようじゃ。(塗る)

**勘太** (さらにうめきながら身をよじる)

**おまん** おほほほほほ。よい塩加減じゃそうな。どれ、味付けを変えましょう。今度は、狸の辛子あえ。(塗る)

**勘太** (うめきながら身をよじる)

**おまん** いひひひひ、夏も盛りじやて、もう少し効かせましょう。(塗る)

**勘太** (さらにうめきながら身をよじる)

**おまん** いひひひひひ。次は、どれにしようかいな…。

天狗 おまん。  
おまん  
はい。  
天狗 狸廻しの役、こいつらにもさせてやれ。  
おまん かしこまりました。

おまん、壺の載った盆を甚兵衛に渡す。  
甚兵衛、壺を選んで勘太に塗り込み、勘太は、うめきながら身をよじる。  
続いて、新兵衛、緋牡丹も、それぞれの思い入れにて塗り付ける。

天狗 なかなかの見物だったぞ。おまん、その狸は縛り付けておけ。着替えてくる。  
胡弓、手伝え。(先に去る)  
胡弓 はあい。(付いて去る)

おまん、新之助に手伝わせて片隅の柱に勘太を縛り付けている。

新之助 おまん、こいつは何をしたんだ。

おまん 知らないねえ。

緋牡丹 なんか噂ぐらい聞いてないのかい？

おまん 噂ぐらいは聞きました、当てになりませんからねえ。

緋牡丹 それでもいいから聞かせておくれよ。

おまん まあ風の噂じゃあ、あちら側になにやら密書を…。

緋牡丹 密書って？

おまん 風が強くて聞こえなかったね。(去る)

緋牡丹 こんな酷い仕打ちをされてさ、いったい何したって言うんだい。

勘太 ……。

新之助 今の噂は本当なのか？

勘太 ……。

緋牡丹 たとえ噂が立ったとしても、それだけでこんな仕打ちはあるまいだろうよ。

甚兵衛 痛かつたらう、堪忍しとくれ。

緋牡丹 おっと、そりゃあ聞き捨てならねえな。

甚兵衛 なにさ。

緋牡丹 どこの噂か知らねえが、河童に密書を出したとあれば、裏切り者と言われて

も、申し開きは出来めえよ。天狗の旦那が疑って、縄掛けられたその上は、

疑い晴れるその日まで、こいつは狸のままだろうから、旦那に従う俺たちが、

そのお仕置きに加わるも、いわば一族固めの印、なにも謝ることあねえ。

緋牡丹 だからって、あんまりじゃないか。

新之助 まあ、それ以上言わないがいいさ。今度はこっちが疑われちゃう。

甚兵衛 火のないところになんとやら、火が点いたなら、てめえで消しな。

おまん (奥の方で)お召し替わり。

天狗、浴衣に着替えて出てくる。  
胡弓、白い布を掛けた三宝を持って付いて出る。

天狗 (ぐったりした勘太を見て) ほう、狸寝入りでもしおったかな…。いや、狸がいると暑苦しいものだな。胡弓、こっちへ来て扇げ。  
胡弓 はあい。

胡弓、三宝を置いて天狗の傍に行き、団扇で天狗を扇ぐ。

天狗 さて、さつき話した作戦だが、痺れ巻きをばら撒くにしても、撒き手があるわな。

甚兵衛 おっしゃるとおりで。

天狗 どうだ、甚兵衛。おまえがやるか？

甚兵衛 はあ、名譽の仕事ゆえ、お引き受けしたいは山々なれど、ひとつここは、勘太にやらせるがよかろうと存じます。

天狗 なに、その狸めにやらせよと？

甚兵衛 は。その狸めは、河童と通じた裏切り者と聞き及びます。本来ならば疑い掛かったそれだけで、打ち首になってもよかろう所、天狗様のご高恩にて、いわば拾ったその命。ご恩返しその証しに、勘太に行かすが上策かと。  
なるほど。それは妙案だな。  
……………

天狗 おい勘太、ご恩返しばかりじゃねえ。いまや縄付きの身じゃねえか。ここで立派に操を立てて、疑い晴らして仲間に戻れば、また不自由なく暮らせるじやねえか。いつまで気持ちに縄付けて、片身を狭めて暮らすより、義理を果たしてきつぱりと、男になったがいいだろうよ。なあ、緋牡丹、おめえも大事の小狸に、そう言ってやるがいい。  
……………

緋牡丹 おい勘太。こうなったからにはよ、うんと言っちゃまった方がいいんじゃないのかい？  
……………

勘太 (にやりとして) 狸と言えども男のはしくれ。人前でなぶられて、さぞ口惜しからうよな。その耐え忍ぶ姿に感じ、心ばかりの褒美をやるう。胡弓。

胡弓、勘太の猿轡を取り、手の縄目を緩めてやって、三宝を前に置く。  
勘太、ゆつくりと白い布を取る。

そこには、睡蓮の付けていた髪飾りが載っている。

勘太 こりや睡蓮が身に付けし…。

天狗 覚えの品か？

勘太 (うなづく)

天狗  
それなら話が早くてちよいどいい。生け捕りにした雌狐を、生かすも殺すも返答次第。ここは思案のしどころさ。

勘太、それをじっと見て考えている。他の者たちは黙ったままだ。

勘太  
(ゆっくりと顔を上げ)…わつちが、撒きに参りやす。

緋牡丹  
勘太…。

天狗  
まことか。

勘太  
はい。ここできつぱりお役を果たし、男を立てて参ります。

天狗  
その言葉、忘れるなよ。

勘太  
…………。(無言で一礼する)

天狗  
そういうことなら縄目も解いて、少しは楽に寝かせてやろう。おい胡弓、こ

いつの身体を風呂で清めて、薬草でも処方してやれ。

胡弓  
お安い御用さ。

天狗  
ついでにおまんに声を掛けて、酒の支度をさせておけ。

胡弓  
かしこまりんばのかきつばた。

胡弓、勘太の縄を柱から解いて、奥に連れ去る。

天狗  
さて、酒の支度が整う間、計画の成功を前祝って、いつもの歌で盛り上がるぞ。それっ！

甚兵衛、茶碗を箸で叩くなどしてコンチキチンと拍子を刻む。

天狗  
天狗の鼻は なぜ高い はいっ！

一同  
天狗の鼻は なぜ高い

天狗  
天狗になって いるからよ はいっ！

一同  
天狗になって いるからよ

天狗  
天狗の鼻は なぜ赤い はいっ！

一同  
天狗の鼻は なぜ赤い

天狗  
真っ赤な嘘を 隠すため はいっ！

一同  
真っ赤な嘘を 隠すため

おまん、銚子や杯などの載った膳を持って出る。

天狗  
おまん、女子の手配はよかろうな。

おまん  
すべて御前の仰せの通り。

天狗  
うむ。呼んでくれ。

おまん  
(うなずいて手を叩き)おはまさん、お入りなさいよ。

派手な着物を着せられた蛤が入って来る。

甚兵衛  
おまん

誰なんですかい、この女は。

最近どこやらから流れ着いて、峠のへそやで働いている女なんだが、どうい  
うわけか天狗の旦那が気に入って、連れて来いとおっしゃるから、お伝さん  
から借りてきたのさ。

天狗

身形はいささか老けているが、踊りが素敵に色つばいのさ。せつかくの前祝  
だ、ひとつ座興に踊ってもらおう。さあ、たっぷりと見せてやれ。

筵たちが奏でる曲に乗って、蛤が踊る。

一同  
天狗

やんや、やんや。

よし、ここからは無礼講だ。俺がいたらば気兼ねもしよう。奥の座敷に酒も  
肴もたんまりあるから、思う存分やってくれ。

一同、それぞれに礼を言いながら去る。

天狗

こつちに来やれ。

蛤

はい。

天狗

(注いで差し出し)まずは、ぐぐいと。

蛤

では、頂きましょう。(受けて飲む)

天狗

相変わらず、いい飲みっぷりだな。

蛤

さあ、どうぞ。(注いで差し出す)

天狗

うん。(受けて飲み)それ、もうひとつ。(差す)

蛤

(飲み)はい、お返し。(差す)

天狗

(飲み)いささか酔いが廻ってきたわい。どりや、少し休もうか。

蛤

おや、ずいぶんお弱くなりましたこと。

天狗

なに、弱いものか。それ、注いでくれ。

蛤

よろしゅうござんすか？

天狗

なんの悪いことがあるものか。酒は飲むもの、飲めば酔うものだ、ははは。

蛤

そんなら、どうぞ。(差す)

天狗

ははは…。こりや、随分と差しおったわい。(ぐいっと飲む)

蛤

重ねてもひとつ。(また差そうとする)

天狗

(手で遮り)ちと待て、ちと待て。なんだか少し目が廻ってきた。ほんのちよ

蛤

こつと横になっても文句はあるまい。

天狗

ええ、どうぞお休みなされませ。

蛤

ただ横になるのも興がない。おぬし膝を貸してくれ。

天狗

はい。どうぞお使い下さいませ。

蛤

(蛤の膝枕で横になり)なにか歌ってくれ。

どんなお歌がお望みですか？

天狗 蛤

おぬしの歌ならなんでもいいわ。  
はい。では、ひとくさり歌いましょう。

蛤、近くにあった団扇で天狗を扇ぎながら、やさしく歌う。

蛤

眠りやんせ 眠りやんせ 外は淡雪 ちらちら  
眠りやんせ 眠りやんせ 中は火鉢で ほからほか  
鬼の来ぬ間のお洗濯 啄木鳥こつこつ からかった  
涙垂れ小僧が 泣きやんで お目々の帳が 下りてきた  
眠りやんせ 眠りやんせ ゆつくり朝まで 眠りやんせ

天狗は、この歌を聞きながら寝入ってしまう。

とても穏やかな天狗の表情を眺めている蛤――。

その瞬間、天狗の耳から仕掛けにて緑の玉が零れ落ちる。

蛤

こりや、しずめだま…。

玉を手に取り、懐から印籠を出して入れる蛤と、ぐっすり寝込んでしまった天狗を、筵の幕が隠していく。

## 八、水月堂 神楽殿前

静かに筵の幕が開くと、神楽殿の下で坊主尼が手を合わせている。  
しばらくして、蛤がやって来る。

蛤

(後ろから)こんにちは…。

坊主尼

(声にびっくりして振り向き)…ああ、なんだ、へそやのおはまさんか。今日もお参りかい？

蛤

ええ。

坊主尼

毎日、ご苦労様だねえ。

蛤

いえいえ。そちらもなにか願掛けですか？

坊主尼

え？

蛤

なんだかこうして…。(祈る仕草)

坊主尼

ああ…。ここ二、三日、仲間の睡蓮って子の姿が見えなくて…。

蛤

そうですか…。

坊主尼

まあ元気な子だから、そのうちふらっと帰ってくるとは思うけど、じっと待つてもいられないから、こうしてね。

蛤

それはご心配ですね。ついでと言っては失礼ですが、一緒にお願いしてきま

坊主尼　　そうしてくれると有り難いよ。  
蛤　　では、行って参ります。  
坊主尼　　ああ、足元に気を付けて。

蛤、会釈して去る。  
まもなく、別の方から長十郎が入ってくる。

坊主尼　　どうだった？  
長十郎　　今日は、西の辻まで行ってみたけど駄目だったよ。  
坊主尼　　そうかい…。(戻ってきた長五郎に) そっちはどうだい？  
長五郎　　十二支庁の連中に当たってみたが、手掛かりはねえな。  
坊主尼　　いったいどうしちゃったんだろうねえ。  
長五郎　　黙って消えるような子じゃねえはずだよな。  
坊主尼　　そうだよねえ。  
坊主尼　　(履物を手に走り込み) おいおい、これって睡蓮が履いてたやつじゃねえか？  
坊主尼　　ああ、たぶんそうだよ。どこにあったんだい？  
坊主尼　　釣鐘池の向こう岸で見付けたんだ。ふたつ並べて置いてあった。  
坊主尼　　並べて…。  
坊主尼　　ああ、もしかして入水したんじゃないか？  
長十郎　　入水…？  
坊主尼　　うん。ここんとこずっと天狗の仲間に付け回されて疲れきっていたからさ。  
長十郎　　でも、あの睡蓮が入水なんてするかしらん。  
坊主尼　　俺だってそうは思いたくねえが、こうして揃えて脱いであったんだ、そう考  
坊主尼　　えても無理はねえだろ。  
長十郎　　だけど、祭も近いこんな時に、入水するとは思えないし、履物があつたの  
坊主尼　　で、向こう岸なんだろう？  
坊主尼　　ああ…。  
長十郎　　わざわざ天狗の一味が大勢いる向こう岸まで出掛けて行って、そこで入水す  
坊主尼　　るかなあ。  
坊主尼　　そりゃ、当て付けに決まってるだろ。  
坊主尼　　当て付け？  
坊主尼　　ああ、とにかく睡蓮は天狗たちを嫌ってたからな。死んで抗議したわけよ。  
坊主尼　　まあ、睡蓮ならありうるかもな…。  
坊主尼　　そうかなあ…。  
坊主尼　　どっちにしても、まだ睡蓮は見付からねえんだし、祭どころじゃねえだろう。  
坊主尼　　もう稽古なんかやめにして、天狗の野郎たちに一泡吹かせてやろうじゃね  
坊主尼　　えか！  
坊主尼　　一泡つて、喧嘩でも仕掛けるってのかい？  
坊主尼　　当た棒よ。こつちがおとなしくしてると思っつけて付け上がりやがって、なんの



長五郎 相談もなしに森の木は切り倒すわ、向こう岸から砂利を撒くわ、もうやりた  
い放題じゃねえか。ここんとこ水の出が悪いのだって、ご先祖様のお怒りに  
触れたに違いねえ。これ以上、黙っていられるか！

亥之助 だろ。ここのままでやられて、泣き寝入りしてられるのか？どうなんだ、おい。  
うん…。

長五郎 うんじゃわかんねえ。天狗んとこに乗り込むかどうか聞いてんだ。  
そうさなあ…。

亥之助 くそつ、煮え切らねえ野郎だな。この腰抜け！  
おい、その言い方はないだろう。

長十郎 そうだよ亥之助、ちよつと言い過ぎだよ。

亥之助 なんだ、言い過ぎだ？言い過ぎが聞いてあきれらあ、この屁垂れ兄弟！  
なんだと。

亥之助と長五郎、つかみ合いになる。坊主尼、なだめている。

河童 (入りつつ) どうしました？

坊主尼 ああ、亥之助が天狗に喧嘩を仕掛けるって言い出して…、そしたら…  
河童 (言わせず二人の間に割って入り) まあ二人とも、落ち着きなさい。

長十郎や坊主尼も手を貸し、なんとか二人を分け離す。

河童 まあ落ち着いて聞いてください。たしかに近頃の天狗ども、無理を通り越し  
てのし放題、堪忍袋の緒も切れましよう。しかし、前にも言いましたが、こ  
こで我慢をし通せず、こつちが先に手を出したら、それこそ天狗の思う壺、  
一気呵成に攻め込まれ、立ち退きどころか、我等は全滅。ここはなんとか踏  
みとどまって、心ひとつに稽古を仕上げ、祭をするのが一番なんです。

亥之助 もうその話は飽き飽きだ。それにほら…(履物を指し)、その睡蓮の履物が  
向こう岸に並べて置いてあったのを、さつき見付けてきたんです。おそらく  
入水したに違えねえ。祭の稽古どころじゃねえや。

坊主尼 まだ入水と決まったわけじゃなし。もし今ふらりと戻ってきて、祭がやめに  
なったと聞いたら、どんなに悲しむか知れませんよ。だから、どうか私の言  
葉を聞いて、稽古を続けてくださいな。

坊主尼 (河童に) ありがとうございます。(亥之助たちに) ね、そうしよう。ここまで  
我慢してきたんじゃないか。とにかく今は背骨祭に向かってさ、稽古の仕上  
げをしようじゃないか。

亥之助 いやだと言いたいところだが、河童さんがそこまで言うなら、ここは抑えて  
やらんでもねえ。

河童 それなら、喧嘩入りは諦めて、稽古を続けてくれますか？  
亥之助 仕方ねえ、今日のところはそうしましょう。

河童  
それで私もほっとしました。今から随石にお参りして、睡蓮の無事を祈つてきましょう。

坊主尼  
お願いします。

河童  
そう言えば、おはまさんは今日も？

坊主尼  
ええ、ちよつくら前にやって来て、今お参りに…。

河童  
それはそれは。では、私も念入りに、願を掛けて参りましょう。

河童、去る。

坊主尼  
(去るのを見届け)さて、どこから始めようかね。

長十郎  
俺たちの場面は随分やったし、二人のところを先にやったらどうかな。

坊主尼  
そうだね、亥之助の出番は、ついこないだ決まったばかりだから、ほとんど稽古してないし。

亥之助  
やるのはいいが、どうして俺がイナゴなんだ。情けねえ。

坊主尼  
イナゴだったってクチナワイナゴさ、吐き出した唾で相手を溶かしちまう強い化けイナゴなんだ。あんたにびったりじゃないか。

亥之助  
まあな…。

長五郎  
じゃあ、俺たちはちよつと向こうで浚ってくるよ。

坊主尼  
ああ、行つといで。

長十郎たち、去る。

坊主尼  
そんなら、あたしの語りに合わせて動いておくれよ。  
おう。

亥之助  
じゃあ行くよ。(手で太腿などを叩きながら)その時、雷鳴とどろき渡り…。

坊主尼  
ああ、ちよつと待ってくれ。

坊主尼  
なんだよ。

亥之助  
まさか俺から稽古だなんて思ってたが、そういうことなら裏の楽屋に行つて被り物と衣装を取つて来よう。

坊主尼  
いいじゃないか、稽古なんだからさ。

亥之助  
こつちは役者で出るなんて初めてなんだよ。しかもイナゴの役だろ。なんも付けなくてやれるかよ。すぐ取ってくるからよ。(去りかける)

坊主尼  
(後ろから)どこにあるかわかるのかい？

亥之助  
(振り返り)いや、よくわからねえ。

坊主尼  
仕方ないねえ。(追つて去る)

誰もいなくなった境内。風の音――。

風呂敷包みを持った勘太が、辺りを窺いながら入ってくる。

そして、誰もいないのを見届け、片隅に置かれた茶器などの盆に近付く。包みを解いて巻物を出し、ためらった後、決心して蓋物に入れ始める。

亥之助 (手ぶらで出て) おい、何やってんだ！  
勘太 ……

亥之助、一瞬怯んだ勘太に飛び掛って取り押さえる。

亥之助 (取り押さえつつ) この野郎、ふざけやがって。(大声で) おうい、曲者だ、みんな戻って来うい！

長十郎、長五郎、駆け戻ってくる。

亥之助 おい長五郎、そっち押さえろ。  
長五郎 合点だ。

亥之助 よし、あの木に…(連れて行き) 長十郎、押さまえてるからふん縛れ。  
長十郎 わかった。(縄か帯などで木に縛る)

坊主尼 (衣装など持って出て) なんだい、勘太じゃないか。

亥之助 おう。どうやらそうらしいな。

坊主尼 なにやってたんだい？

亥之助 なんだか知らねえが、その蓋物になんか入れてやがったのさ。

坊主尼 (見に行つて中を探しつつ) なんだらう…。ああ、そう言えばカッパ巻きが増えてるようだね。

亥之助 カッパ巻きだあ？

坊主尼 ああ、ほら稽古の合間でパクつくために、いつも持ってきてるだろ。それがなんだか増えてるのさ…。(戻つて) あんた、カッパ巻きを持ってきたのかい？

勘太 (おずおずうなずく)

坊主尼 なんでそんなもの…？

勘太 (ぼそぼそ) 差し入れに…。

亥之助 馬鹿ぬかせ。どうしておめえが差し入れするんだ。しかも、こそこそしやがって。毒でも入れたに違えねえ。

長五郎 おう、こいつが差し入れに来るいわれがねえ。さあ、ぬかせ！あの巻物に何が入ってる？

勘太 あの巻物には…。

長五郎 あの巻物には？

勘太 あの…、巻物の…、中には…。

坊主尼 ああ、じれつたいねえ。早く言いなっ！

亥之助 (手の力を強め) とつとと白状しやがれ！

勘太 はい…。あの巻物の中には…。

言おうとした瞬間、どこからか吹き矢が飛んできて勘太に刺さる。

勘太は、ウツとなって黙る。

甚兵衛

(槍を構えながら出て)よく喋る野郎だ。

亥之助たち、すぐに新之助も槍を構えて出てきたので動けない。

甚兵衛

しくじりやがって。おい。(新之助に目配せする)

新之助、呼子を取り出しピュッと吹く。

おまん、弱りきった姿で縛られた睡蓮を引っ立てて出てくる。

甚兵衛

腰抜け狸に、雌狐の踊りでも見せてやれ。

おまん

はいはい、そう致しましょう。

おまん、細い針金のような物を睡蓮に当て、手元の持ち手を操作する。

睡蓮、電気が走ったように身をくねらせ、悲鳴をあげる。

おまん

これ、狐の鳴き声はコンコンじゃ。憶えの悪いガキだねえ。それ、もう一度鳴いてみる。(手元を操作)

睡蓮

(身をくねらせ)コンコン！

おまん

ひひひ。まだまだそれでは子狐じゃ。おまえのような性悪の雌狐は、もつと科を作って身体をくねらせ、コン、コンと鳴かんせ。(手元を操作)

睡蓮

(身をくねらせ)コン、コンコン！

おまん

違う、違う。何を聞いておるのじゃ。ココンコン、ココンコンだと教えたばかりではないか。それっ！(手元を操作)

睡蓮

(身をくねらせ)ココンコン…

睡蓮がやろうとすると、おまんが難癖を付け、何度かやり直させる。

甚兵衛たちは、大笑いしてそれを見ている。

やがて、睡蓮は「コン」と一言鳴いてぐったり倒れる。

勘太

(耐え切れず)睡蓮、勘弁してくれ！

甚兵衛

しくじるから、こうなるのさ。

新之助

せっかく貰った汚名を雪ぐ大事のきっかけ、逃すとは愚かなやつだ。

甚兵衛

もう命乞いも届くまいが、べらべら喋られても面倒だ、ひとまず連れて帰ってやろう。さあ、新之助。

新之助、勘太の縄を木から外して引き立てる。

甚兵衛

(亥之助たちに)縛ってくれて手間が省けた。お礼代わりに、この雌狐を置い

ていくぞ。

おまん  
あ、置いてっていいのかい？

甚兵衛  
遅かれ早かれくたばるだろうさ。餌を与えて飼うだけ無駄だわ。

おまん  
(ふっと笑って)なんだか天狗さんに似てきたねえ。

甚兵衛  
(満更でもなさそうに)まだまだ遠く、及ばねえよ。

甚兵衛たち、勘太を引き連れて去っていく。

残された一同、倒れている睡蓮に駆け寄る。

坊主尼  
睡蓮、大丈夫かい？

長五郎  
おい睡蓮、しっかりしろ。

四人で睡蓮を囲んでいるところに、河童と蛤が戻ってくる。

河童  
ただいま戻り…、どうしました？

長十郎  
(手招き)河童さん、睡蓮が、睡蓮が…。

河童  
(近寄り)睡蓮…。(様子を診て)なんとか息はしているようです。すぐ楽屋に運んで、ひとまず手当てを！

坊主尼  
はい！長十郎、負ぶっとくれ。

長十郎  
うん。

坊主尼  
睡蓮、しっかりするんだよ。

坊主尼、長十郎に負ぶさった睡蓮を励ましながら去る。

河童  
いったい何があったんです。

亥之助  
どうもこうもねえんです。さつき勘太が忍び込み、妙な小細工しやがったから、ふん捕まえてとつちめて、口割らそうとしていたところ、天狗の手下がやってきて、縄で繋いだ睡蓮を、針で突ついて踊らせて、さんざん弄って痛め付け、ぐったり倒れた睡蓮を、捨てて戻って行きやした。

河童  
酷いことを…。

亥之助  
もう酷いどころの騒ぎじゃねえ。生き地獄とは、このこった。もう、おらあ勘弁できねえ。長五郎もそうだろうがよ。

長五郎  
ああ、もちろん俺もだ、河童さん。やつら、鳴いて苦しむ睡蓮を見て、けら笑っていたんです。とても正気の沙汰じゃねえ。

亥之助  
河童さん、睡蓮が何を言っているんだい。なんの罪もないあの子をさらって連れて行った挙句、ぼろぼろにして捨てたんだ。いくら仏の河童さんでも、こりゃあ辛抱ならねえはずだ。どうなんですかい、河童さん。

河童  
その辛抱は…。

亥・五  
その辛抱は？

河童  
その辛抱は…。

亥・五  
河童

その辛抱は？

ええ、辛抱…、ならぬ。辛抱…、ならねえ。もう辛抱しちやあいられねえわ！  
堪忍袋の緒が切れた！カッッ、パッ、パッ、パッ、パッ、パッ、パッ、パッ、パッ、  
パッッ！

河童、目を剥いて仁王立ちになるが、次の瞬間、頭に血が上って失神する。

亥之助

河童さん！

長五郎

(頭に手をやり)うわっ、すごい熱だ。

亥之助

おい、皿の水が干上がってるぞ。急いで水を入れなきゃ危ねえ。

長五郎

おう、合点だ。

亥之助

おはまさん、すぐ戻るから。それまで河童さんを頼んだけ。

蛤

はい…。

亥之助と長五郎、それぞれ違う方向に走り去る。

蛤

(近寄って)だいじょうぶですか？

蛤、静かに河童の身体に寄り添う。

その瞬間、河童の耳から仕掛けにて真つ赤な玉が零れ落ちる。

蛤

こりや、ほむらだま…。

蛤、玉を手を取って印籠に入れ、河童を見守りながらじっと考えている。  
ややあって、それぞれに柄杓などを手に持って亥之助たちが戻ってくる。

亥之助

いやア参った…、ほんのちよろつとしか水が出ねえ。えらく手こずった。

長五郎

向こうの水屋も、ちよろちよろだ。(見せ)やっとしさっとし汲んできた。

亥之助

とにかく皿に。

長五郎

合点だ。

二人、慎重に河童の皿に水を注ぐ。

ややあって、河童が目覚めます。

亥之助

ああ、よかった…。

長五郎

だいじょうぶですか？

河童

ああ、大丈夫です…。すみません、なんだか急にぐらっと来て…。

亥之助

まあ無理もねえ。河童さん、今まで怒ったことなんかありませんからね。

長五郎

ああ、俺も初めて見ましたぜ。

亥之助

それで、これからどうしましょう？

長五郎

こうなったら乗り込むしかねえな。

亥之助

ああ、俺もそのつもりだ。どうです、今から天狗の陣屋に乗り込みますか？  
そうですね。ここまでされては、もう黙っているわけに行きません。一気に  
攻め込みたいのは山々ですが、我々は今までいくさというものをしたことが  
ない。飛び道具はおろか、身を守る鎧もありません。

亥之助

そんなものなくたって、こつちが先手を打つとは思うまいから、隙をねらつ  
てうまく攻めれば、天狗の鼻をへし折るぐれえ、なんのことはありませんや。  
そうですね、そうですね。思い立ったが吉日だ。先手必勝、少しも早い方がいい。

長五郎

(うなずき)それじゃあ、さつそく仲間を集めていくさの支度を。

河童

ちよつと待ってくださいませ。

河童

おはまさん、どうしました？

蛤

前にお参りした時に、墓守さんのお話では、もしいくさでも始まると、ご先  
祖様のお怒りに触れ、命の水も涸れるとか。どうやら水の出も悪いご様子、  
ここはなんとか、いくさをせずに…。

亥之助

(遮り)悪いがおはまさん、そんなことは百も承知さ。俺たちや今まで、どん  
な仕打ちをされたって、じつと黙って我慢して、けつして手出しはしなかつ  
たのさ。しかし、今度という今度ばかりは許せねえから、河童さんも決めた  
のだ。こう言っちゃあ失礼だが、よそ者は黙って見ていてもらいたい。

長五郎

ああ、すまねえがそうしてくれ。これ以上天狗に勝手放題やらせていたら、  
俺たち仲間は滅びちまう。

河童

おはまさん、お氣遣いはとても嬉しいけれど、もうこの上の辛抱は、とても  
できそうにありません。

蛤

お話よくわかりました。ただ、辛い話を伺ったのも、他生の縁かと存じま  
すゆえ、ほんの一日二日で結構ですから、いくさの支度に掛からずに、私に  
お預けくださいませんか？

河童

おはまさんに預けると？

亥之助

はい。うまく行くかはわかりませんが、和平のお役に立てればと。  
馬鹿言っちゃいけねえや。聞く耳持たねえ天狗どもに、あんたが役立つはず  
がねえ。

長五郎

ああ。それともなにかい？あんたが行って頼んだら、天狗の野郎が埋め立て  
をやめ、俺達をこのままにして置くとも言うのかい？

蛤

それはどうかわかりませんが、すぐにいくさを仕掛けるより、せめて少し  
でも先に延ばして…。

亥之助

気持ちはとても有り難えが、もうこれ以上は待たれねえ。さあ、河童さん、  
みんなに声を…。

河童

いや、ちよつと待つてください。あたしも、おはまさんが役に立つとは思  
いませんが、遠路はるばる旅をして、通りすがったお女中が、ここまで言っ  
てくださったのも、なにかの縁かもしれませぬ。おはまさん、それじゃあ、あ  
と一日だけ待ちましょう。手立てがあるなら、試してください。

蛤

ありがとうございます。

河童  
亥之助

ご兩人も、いいですね。  
河童さんがそう決めたなら、こつちも従うしかねえが、天狗の野郎はしたたかだから、口約束じゃ当てにならねえ。河童さん、ここはひとつ、覚え書きでも書いて渡してやっておくんねえ。

河童  
蛤

ええ、そうしましょう。(サラサラと書いて、蛤に差し出し) この書き付けをお持ちになつて、うまく事が運んだら、印をもらつてお帰り下さい。はい、そのように致しましょう。

河童  
蛤

それじゃあ、おはまん。

河童  
蛤

吉報お待ち、しています。

深々と頭を下げる蛤と、河童たちを筵の幕が隠していく。

## 九、鳩尾平 天狗陣屋

筵の幕の向こうから、喉から絞り出すような掛け声が聞こえてくる。幕が開くと、勘太が叫びながら無我夢中で竹刀の素振りをしている。しばらくして、湯呑を載せたお盆を持つて緋牡丹が入ってくる。

緋牡丹

ねえ、少しは休んだらどうだい？

勘太

……………

緋牡丹

薬草を煎じたお茶淹れてきたからさ、飲みなよ。

勘太

……………

緋牡丹

(湯呑を差し出しつつ)ほら、飲みなつて。

勘太

(小さく首を振り、再び)…えいっ！やくっ！たっ！

緋牡丹

(大きく)ちよつと勘太！勘太つてば！

勘太

……………

緋牡丹

お願いだから、ちよつと休んどくれよ。

勘太

放つといってくれ…。

緋牡丹

放つとけないよ。昨日から、ほとんど飲まず喰わずでやってるじゃないか。そんなことしてたら死んじまうよ。

勘太

それならそれでいい…。

緋牡丹

なに言ってるんだい！命を粗末にするんじゃないよ。

勘太

でも、わっちのせいで睡蓮は…。

緋牡丹

(静かに)そのことなら心配ないよ。

勘太

え…？

緋牡丹

こつそりお伝さんに頼んで探ってもらったんだ。生きてるってさ。

勘太

本当かい？



緋牡丹

(うなずき)だから…、そりや色々あるだろうがさ…、死ぬなんて考えないでさ…。あたしや、あんたに死んで欲しくないんだよ。さあ、とにかく、これ飲みなつて。(湯呑を差し出す)

勘太、黙って受け取り、ゆっくりと飲み始める。  
ややあつて、甚兵衛と新之助が入つて来る。

甚兵衛

なんだ、なんだ。朝っぱらから腑抜け野郎とイチャ付きやがつて。とんだ腐れ女に成り下がつたもんだな。

緋牡丹

お生憎さま。勘太が徹夜で素振りをしてたから、お茶を運んで来ただけさ。

新之助

ほう、徹夜で素振りとは感心じゃないか。

甚兵衛

なあに、どうせ命乞いの一夜漬だろ。役に立つものか。

緋牡丹

そう頭ごなしに決め付けるのはおよしよ。

甚兵衛

犬は犬らしく犬死すりゃあいいのさ。

緋牡丹

なんだつて！

新之助

まあまあ…。どうだ勘太、素振りだけしてても腕は上がらん。俺が稽古を付けてやるから、道場に来い。

緋牡丹

ああ、そりやあ助かる。新之助、頼んだよ。

新之助

任せとけ。おい。(勘太を促して先に去る)

勘太、緋牡丹に軽く会釈して追い掛ける。

緋牡丹

どうしてあんな言い方するんだい。

甚兵衛

お前の方こそ、いい加減にあんな腰抜けとは縁を切り、世間の認める執権様に鞍替えしたらいいじゃあねえか。(しな垂れ掛かる)

緋牡丹

(かわして)執権様ねえ。はて、どこにおわしますのやら。

甚兵衛

え〜い忌々しい。もうこの上は辛抱たまらん、力づくでも。(キツとなる)

おまん

(奥の方から声のみ) お成り〜。

緋牡丹

お成りだよっ！

甚兵衛

わかっつてら！

天狗

(入つて)甚兵衛、いよいよ明日は出陣だな。

甚兵衛

ははっ。

天狗

腰抜け狸のしくじりで、逆に策を講ずる手間が省けた。もはや手ぬるいことはせず、一気に追い出すことにしたから、その段取りをよく聞いておけ。

甚兵衛

御意。

天狗

まず森の方から火を放つ。河童どもは火に弱いから、十中八九、池の方に逃げるはず。我々は、岸辺に陣取つて、槍を構えて迎え撃つ。また、潜つて身を隠すやつもいようから、舟を幾艘か浮かべて、銚と網とで絡め取る。留まろうとするやつは、女子供も容赦はいらん、小皿一枚残さずに一網打尽にしてしまえ。わかっつたな！

甚兵衛

はいっ！

天狗

他の奴等には、お前から段取りを伝えておけ。

甚兵衛

かしこまりました！

おまん

(向こうで)失礼します。(顔を出し)おはまさんが来ておりますが、お通ししてもよろしいですか？

天狗

構わん、通せ。

おまん

では只今…。(去る)

天狗

よし。今のうちに、甚兵衛は武器、緋牡丹は兵糧、それぞれ蓄えを確かめておけ。

二人

はい。(それぞれ一礼して、分かれて去る)

おまん

(向こうで)お連れしましたよ。(顔を出して奥に)おはまさん、お入りなさい。

蛤、入って手を突き、深々と床に頭を付けてお辞儀をする。

天狗

なんだ、改まって。

蛤

明日ご出陣と伺いました。おめでとうございます。

天狗

うん。

蛤

武運の誉れ高い天狗さま、見事ないくさをなさるでしょうが、その出陣を前にして、ひとつお願いがござります。

天狗

なんだ、言ってみろ。

蛤

あたしをお雇いくださいませ。

天狗

なに、おぬしを雇えとな？

蛤

はい。今こそ茶屋の下働き、下拵えから洗い物、薪割りまでも致しますが、所詮つなぎの浮き草稼業。なんの縁か知らねども、こうしてお呼びに預かって、ご最前にしてくださる方が、天下を取ろうと立ち上がるのを、ただ手を叩いてはおれませぬ。ここは一味にお加えいただき、なにかお役に立ちたいと、へそやは今朝ほど辞めてきました。老い先短い年寄りで、足手纏いかもしれないけれど、飯炊きぐらいはできるはず、どうかお雇いくださいませ。そんなら俺の手下になると？

天狗

もしもお許し下さるのなら。

蛤

うん。願いの段、しかと聞こえた。

天狗

嬉しゅうござんす。

おまん

出陣前に召し抱えるも、めでたい吉相。それなら今からおぬしの働きと勝ち戦を前祝って、杯を交わそうぞ。(手を叩き)おまん、酒の支度はよいな。(笑って顔を出し)はい、いつでも出来ておりますよ。

おまん、銚子や杯を持って出て並べる。

天狗

今日は前祝いだ。おまん、お前も飲め。(銚子を掲げる)

おまん

そんなら頂戴致しましょう。(近寄って杯に受け、下がって控える)

天狗  
まん・蛤

(蛤とも注ぎ合つて杯を掲げ)天狗上等！  
天狗上等！

天狗 ははは。まさか出陣前に年増の飯炊き女を抱えようとは思わなかったが、枯れ木も山の賑わいだ、愉快愉快。さあ、ぐっと飲め。(注ぐ)

蛤 (飲み)お抱え頂く上からは、ひとつ我が身に鞭打つて、枯れ木に花を咲かせましよう。(天狗に注ぐ)

天狗 無理に咲かせることはない。(飲み)：いや、おぬしの踊りに花ならあるわ。あれが花とはお恥ずかしい。さあさあ、もひとつ。(注ぐ)

天狗 (飲み)いくさに勝つたら、たつぷり歌と踊りを見せてもらうぞ。  
蛤 なんなりとお見せしようが、その「たら」はいけませぬ。

天狗 なんのことだ？

蛤 今をときめく御大将が、勝つたらなどは申さぬもの。勝つて天下を取るのは必定。天地が逆になろうとも、必ず勝つとおっしゃりませ。

天狗 うん、そう言われると心強い。必ず勝つぞ。

蛤 はい。木っ端微塵になさいませ。(注ぐ)

天狗 ははは、そうしてみせよう。(飲み) そうだ、こういう時はどうしようぞ？  
蛤 どんな時でございましょう？

天狗 いいか、こうして背中に赤子を背負つて：、(手を合わせ女の真似をし)私が死ねばこの子も死にます。どうかお助けてくださいませ。

蛤 (天狗の口調を真似して)ならぬ、ならぬ。知ったことかよ。  
天狗 せめて、背中のこの子だけでも。

蛤 一人にするが可愛そうなら、あの世で一緒になるがいいや。(切る真似)  
天狗 ははは。そんなら殺すか？

蛤 (にんまりして)親子揃つてすつぱりと。  
天狗 すつぱりと？

蛤 はい。すつぱり切つて：、(天狗の目をじっと見たまま、ほむら玉をそつと銚子に入れて)おしまいなされ。

天狗 うん、そのすつぱりが気に入つた！どれ、もうひとつ。(杯を掲げる)  
蛤 はい：、(注いで)どうぞ。

天狗 天狗、上機嫌でぐいっと飲み干すが、ややあつて急に苦しみ始める。

天狗 あいたたたたた、痛い痛い。

蛤 どうなされました？

天狗 急に身体じゆう痛くなつてきた。あいたたたたた、頭が割れそうだ。あいたたたた：。痛い痛い、助けてくれ！

おまん すぐに誰かを！(走り去る)

天狗 あいたたたたた、痛い痛い。

蛤 しつかりなさつて下さいませ！(天狗を抱き寄せ介抱する)

甚兵衛 (駆け込んで来て)大将、大丈夫ですか？

緋牡丹 (駆け込んで来て) いったいどうしたんだい。(近付き) 天狗さん、しっかり！  
痛い痛い…。

天狗 (駆け込んで来た新之助に) おい、胡弓はどうした？

甚兵衛 舟の手配に出てるんだ。

新之助 肝心な時に…。(入って来た勘太に) おい勘太、なにか薬を持って来い！

緋牡丹 ちよつと、胡弓に聞かず迂闊な物を飲ませたら、かえって命に係わるんじゃないのかい？

甚兵衛 ええい、畜生め。

天狗 あいたたたたた、頭が割れて死にそうだ。痛い痛い、助けてくれ。

蛤 (おずおずと) 一粒だけしかございませぬが…。

緋牡丹 なにか薬を持つてるのかい？

蛤 (うなずき) 一人旅ゆえ懐に、離さず持ったる家伝の妙薬。今まで用いた限り

では、効かぬ病は一つもなし。飲めばおそらく、すぐに本復。

緋牡丹 あんたに効くなら安心だ。どうか飲ませてあげておくれよ。

天狗 頼む頼む。早く飲ませろ！

蛤 それではすぐに差し上げましょうが、一粒残った大事の薬、お頼みするも気が引けますが、もしもご容赦くださるのなら、ほんの少しの施しを、頂戴し

とうございます。

天狗 易いことだ。手下に抱えた祝いの品、さあ、なんなりと望むがいい。

蛤 (河童の書状を出し) では、これにお印をくだされませ。(目の前で見せる)

天狗 こりや、河童と和解の覚え書き。さては、おぬし謀りおつたな。

蛤 薬は量って持つてきました。

天狗 喰わせ者めが…、あいたたたたた、痛い痛い、頭が割れる。助けてくれ。

蛤 早く薬をあげたいものじゃ。

天狗 わかった、わかった。すぐに書くから飲ませてくれ。

蛤 では、ここにお書きくださいませ。(筆を渡す)

天狗 天狗、筆を受け取って、書付に名を書き入れる。

蛤 印籠から「しずめだま」を出して緋牡丹に渡し、天狗から離れる。

天狗 さあ天狗さん、早くこれを！(しずめ玉を飲ませる)

天狗 (ややあつて)…痛みが急に収まった。

天狗 よかった、薬が効いたんだね。

天狗 ああ、どうやらこうやら助かった。

天狗 そんなら明日の出陣は？

天狗 (しぶしぶ) 日延べするしか…、なかるうな。(悔しそうに蛤を見る)

天狗 蛤、天狗に深々と黙礼して書付を掲げ、それを懐にしまう。

天狗 その時、向こうから三笑が叫びながら駆け込んでくる。

天狗

天狗

天狗

天狗

天狗

天狗

天狗

天狗

天狗

天狗

天狗

三笑

大変です、大変です！（本舞台に入つて）水がまったく出なくなりました！

緋牡丹

じゃあ源泉が涸れちまったのかい？

三笑

はい、おそらく。池の水さえ干上がり掛かっていましたから。

新之助

なんてこった…。

緋牡丹

どうしたらいいんだい？

三笑

とにかく今は祈るぐらいしかありません。河童さんたちは、先に清瀧口に向かいました。どうか皆さんもすぐ来てください。

甚兵衛

天狗さん、どうします？

天狗

どうもこうもねえ。水が涸れたら共倒れだ、行くしかあるまい。

緋牡丹

急がないと、こつちが危ないね。

新之助

おう、すぐ行こう。

三笑

お願いします！

一同、ばらばらと駆け出して行く。

新之助

（ぼんやりしている蛤を見て勘太に）おい、おはまさんを頼む。

勘太

わかった…。

新之助が去った後、勘太は蛤の手を引いてゆっくり去る。

誰もいなくなった空間を、筵の幕が隠していく。

## 十、奥の院 清瀧口

ゆっくりと筵の幕が開くと、井戸の前で三笑が一心に祈っている。

その傍に河童と仲間の五人が固まり、反対側に緋牡丹と新之助が並んで、それぞれ口の中で小さく「こんざさら、こんざさら」と唱えて祈っている。

少し離れた場所に胡弓に付き添われた天狗がいて、甚兵衛が控えている。

甚兵衛

おい、まだ水は出ないのか？

新之助

ああ、そのようだな…。

甚兵衛

わざわざ駆け付けたのに、じれってえ。

緋牡丹

お願いだから、あんたも静かに祈っておくれよ。そしたら、背中ぐらい流してやるからさ。

甚兵衛

仕方ねえ。（形だけは祈る）

天狗と胡弓も形だけ加わる中、勘太に手を引かれて蛤が辿り着く。

蛤  
勘太  
（はずんだ息を整えて）ありがとうございました。  
いえ…。

亥之助  
（声に気付き、蛤に会釈してから河童に）河童さん、おはまさんが…。

河童、蛤を見てうなずき、手招いて呼び寄せる。

蛤、河童に近寄り、黙って例の書付を差し出す。

河童、受け取って読み、天狗の方を見る。天狗、目を合わせずに軽く頷く。

亥之助  
（その様子を見て）…じゃあ埋め立ては、なしですかい？

河童  
（大きくうなずき）ええ、これでいくさもせず済みます。

亥之助  
そいつあ、なによりだ。おい、三笑。いくさも埋め立てもなしになったぞ。

三笑、井戸の方を向いたまま静かに頷き、祈りを続ける。

蛤と勘太も加わって、しばらく祈りと唱え声が続くが水は出ない。

坊主尼  
出ないねえ…。

長十郎  
やっぱり遅すぎたんだ…。ご先祖様のお怒りに触れたんだよ。

長五郎  
おそらくそうに違いねえ。いがみ合いが長過ぎたんだ。

睡蓮  
きつとそうだよ。そうに違いはない…。

甚兵衛  
ったく、どうなつてんだっ！

三笑  
（すつと立ち上がって振り向き）心を籠めて祈りましたが、どうやら届かぬ様子です。このままここで祈っていても、いつ湧き出るとも知れませんが、今から僕が井戸に降り、泉の底にひれ伏して、命を賭けて拝んできます。

睡蓮  
そんなことして戻れなくなったらどうするの？死んじゃうかもしれないよ。  
（ゆっくり首を振り）大丈夫、心配しないで…。

睡蓮  
でも…、もし万一…。

三笑  
（遮って静かに）すべては、ご先祖様に…。（一同に大きく）行つて参ります！

三笑、井戸に飛び込む。

睡蓮  
お願い、みんな祈つて！もっと強く、もっと深く！お願いします！

一同、それぞれに深く祈り、唱え声もやや高まるが水は出ない。

ややあつて、河童がすつと立ち上がって振り向く。

河童  
もうこれ以上、ただ待っているわけに行きません。三笑は戻らないし、水

の湧き出す気配もない。ここは、私が下りて行きましょう。

河童さんが、この中に…？

ええ。このままお怒りが収まらなければ、三笑どころか一同揃って共倒れです。心底お詫びをする気なら、私が下りて行かなければ…。

亥之助

でも、こんな底の知れない井戸に入ったら、戻って来れるかわかりません。そういうことなら、俺が入って…。

長五郎

いや、俺に行かせてもらいましよう。

河童

(首を振り)いがみ合いが長引いたのは、私が至らぬせいもある。ご先祖様に詫びるなら、この身を賭けて行くしかない。どうか心配なさらずに、ここは私に任せてください。

天狗

ちよつと待ってもらいてえ。いがみ合いなら、俺も火種だ。一人いい顔させられねえ。井戸が怖くて残ったとありやあ、それこそ天狗の鼻も折れ、この先肩身も狭くなり、風を切っては過ごされねえ。ここは天狗の顔を立て、先に行かせてもらいてえ。

河童

いえいえ、それでは立ちません。私が先に下りましよう。

天狗

いやあならねえ、俺が先だ。

河童

いいえ、私が。

天狗

俺だと言うに。

蛤

お二人とも、行くには及びませぬ。

天・河

………  
私が井戸に入りましよう。

蛤

おはまん…。

河童

お二人とも、この土地にとっては大切な方。この先共に末永く、みんなを守って行かねばなりません。暗くて深い井戸に下り、もしものことがあったとしたら、それこそ一族共倒れ。あたしは旅の流れ者、老い先短い身ですから、なにも氣遣いごさいません。どうぞ行かせてくださいませ。

河童

そのお気持ちは嬉しいけれど、この地を治める我々が片を付けねば、ご先祖様のお怒りも鎮まらぬはず。貴女がそこまでなさる義理はありません。

天狗

こればかりは、俺も同意だ。あんたが身を切るいわれがねえ。

蛤

生きるか死ぬかの瀬戸際に、昔語りは致しません、こうしてお二人に巡り合い、共に祈っておりますのも、並々ならぬ他生の縁。どうか頼みを聞き入れて、心一つに重ね合わせて、あたしを送って下さいませ。皆様さらば！

蛤、一瞬の沈黙を盗んで井戸に飛び込む。

一同、あっけに取られるが、すぐ気を取り直して祈り始める。

今度は天狗も加わり、さらに深く祈り、唱え声も強まるが水は出ない。

ややあって、睡蓮、ふと蛤の言葉に思い当たって立ち上がり、ゆつくりと背骨踊を始めだす。

勘太、それを見て、引き込まれるように立ち上がり「やつせ〜、よいせ〜」と囃しながら踊りに加わる。

それに釣られて、河童の仲間たちが、ひとりずつ踊りの輪に囃しながら加わっていき、まるで背骨祭が始まったような踊りの輪が出来る。

次第に天狗の仲間も輪に加わっていき、ついに天狗も勢いに巻き込まれ

て加わり、全員で「やっせー、よいせー」と囃しながら踊る。  
全員の踊りが最高潮に達した時、井戸から水が噴き上がる――。  
一同、それぞれに喜んで跳ね回り、睡蓮と勘太が笑顔で手を取り合う中、  
囃し声と共にゆっくり暗くなっていく。

## 十一、三途の川 六道堤

闇の中から入れ違いに筵たちの声が聞こえ始め、次第に大きくなっていく。

### 筵たち

おんばらばら うんばらばら  
おんばらばら うんばらばら  
おんばらばら うんばらばら  
おんばらばら うんばらばら

その声が、さらに大きく拡がっていき、うつすらと明かりが戻ると、  
どうやらそこは六道堤らしい。――堤の上にトコヨミが立っている。  
川原に蛤が倒れており、その両脇で天狗と河童が見守っている。  
ややあって、天狗と河童は、二人して蛤の身体に三笑の上着を掛け、  
その上に守り袋を置いてから、奥の方に去って行く。  
その姿が消えるのを見届けて、トコヨミが蛤に近付き杖を高く振り上げ  
ると、筵たちの声が遠退いていき、蛤がぼんやりと目を覚ます。

トコヨミ 気が付いたかい？

……。

### 蛤

トコヨミ

### 蛤

トコヨミ

(奥の方を指して)向こうで誰か待ってるよ。  
(ゆっくりと半身を起し)誰でしょう？  
(守り袋を差し出し)これを渡せばわかるとさ…。

蛤、守り袋を受け取って、じつとそれを見詰める。  
トコヨミ、その姿を見守ってから静かに姿を消す。  
蛤、上着に気付いて、それを手にしばらく考えている。  
やがて、なにかを思い出したように立ち上がり、奥の方に目を移す。  
よく見ると、薄闇の向こうにある筵たちの幕に、小さな隙間があって、  
そこから微かな光が差しているようだ。  
蛤は、その光に向かってゆっくり、しかし力強く歩いて行く。